川柳雜誌

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十三年一月十五日發行　第十五卷第一號（毎月一回十五日發行）

麻生路郎★編輯

1

★第十五卷　第一號★

川柳雜誌　特輯一月號目次

日本柳壇百人撰……諸　家…(八)

元日を語る……(一)
小寺繪甫（鷗）　渡邊　均　長野晴濱
田村孝之介　淺田　一　塚越正光
森井荷十　柴谷宰二郎　前田五健
川上三太郎　村田周魚　伊志田孝三郎

武玉川三篇研究（十三）……梅本秋農屋　森東魚…(六)　姪子省二

十五週年を迎へて……(一)

春興なゝ草……東　魚麿…(八)

川柳評釋百句……麻生路郎…(二)

柳誌「川柳人」の發禁に際して……石田沐天…(一九)

○

不朽洞句抄……麻生路郎…(二)

戰地より（句）……月原宵明…(二〇)

近作柳稿……麻生路郎選…(四)

川柳塔……諸　家…(二)

一路集
日の出……前田五健選…(八)
パイプ……市塵沒食子選…(一八)

各地柳壇……(二三)

編輯後記……(表三)　社關係の人々……(表三)

川・協・の・頁
同情週間　師走川柳大會……川柳人協會…(二四)

柳人素描……(一七)小林不濕人君　(一八)島生古弗君
(二六)梅本秋農屋君……(一八)

柳界展望……(一八)　川柳書架……(二三)

文樂人形（表紙）……紫谷宰二郎

川柳雜誌社

一月例會

乞鉛筆持參

一月　會場　誓得寺（電南四八八六）大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

兼題　【朝の酒】三句　【襟卷】三句

柳話　題未定

會費　二〇錢（川協會員賣提示の方は一五錢）

呈賞　兼題　天位に粗品を呈す（出席者に限る）

27　夜六時

森東魚選
橋本綠雨選
麻生路郎

來會歡迎

川柳雜誌社
大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九
幹事　紳樂・豆秋・いわを・ライト・里十九

冬は温泉へ！

南紀の温泉

紀州泉質日本一　南紀樂園　泉量日本一　白濱・湯崎
難波より毎日直通運轉

療養向　椿　龍神（南部よりバス）
療養向　湯　谷（紀伊椿よりバス）
療養向　川　湯（朝來よりバス）
療養向　湯　川（朝來よりバス）
療養向　周參見（周參見下車）
紀の松島　勝浦（勝浦下車）

近くの温泉

炭酸鐵泉　天　見（天見下車）
補公道踏査を兼ねて　錦　溪（三日市町下車）
ハイキングを兼ねて　小　川（尾崎下車）
茅海一帶　淡輪温泉（淡輪下車）
お家族づれの樂園　大濱汐湯（劇・ニュース映畫）

南海電車

川柳雜誌

第十五卷　第一號

★十五周年を迎へて★

東亞に低迷した戰雲は我が帝國の强行軍によつて早くも拂拭され國民擧つて戰捷の春を壽ぐに到つた。

この時にあたつて我が『川柳雜誌』は十五周年を迎へて一段の飛躍を期するも又銃後に於ける文化的貢献の重大さを痛感するに外ならない。こゝに誌面は形式内容共に柳誌として未踏の地域に進出せんことを劃し先づ第一に型を菊倍判とし創作内容を嚴選し、紙質を改め颯爽たる雄姿を以てデビユーすることとした。切に御愛援を切望する。

元日を語る

皇紀二千五百九十八年

（小寺鳩甫）

渡邊　均

敢て二五九八年の元旦とは限らないのです。毎年、元旦の私の行動は判で捺したやうに一定してゐます。家内でのお祝ひを濟ませてから先づ天滿宮へ參詣それから亡父の墓へ參る。次に老母が岡町にゐるので、家内ぢうで、そちらへ行き、終電車で歸宅。これ毎年不變の元旦スケヂユールです。二日二日は在宅。來客續きのため主客共々大抵トラになつてゐる。

長野晴濱

未だ嘗てない元日を持ちました。

先づ十軒ばかりの御年賀巡りこれは例年の通りで、これで夜に入りました。

夜に入つてからです。

五十位、四十位、三十位の友人の來客、それに二十代の若者である愚息、愚妻、小生、計六人が、夜の九時頃から明くる朝の六時半まで居明かして話しつづけました。時には二三人づつ別々の問題にかたまり、時には一つ問題に一座六人が打向ひつつ。（お酒で呑み明かしたのでありません、それなら寧ろ珍しくはないでせう。）

二三度時刻に氣附いて立ちかかつた人々もあつたのでしたがどうにもその儘立上りきれない氣持が雖の裏にも漲つてゐたのでした。

不思議な發作が、凡そ一人前

の人間である各年代を揃へてゐる六人の一座を捕へたのでしたこの中には初對面同志の人もあつたのです。何らの豫期なしにこんな事になつたのはただ不思議といふより外ありません。人間の氣持の單なる氣紛れとは思へません。人間の衷の何かの奥深いものの何かの緣あつての發顯と感じられます。この感じは然う急には消えて終ひはしないでせう。

誠に珍しくもよい一月一日を過させていただきました。

田村孝之介

本年六歳になる次女が正月におとうさんの不在に對し文句を申しましたので五年振りで旅行も中止し、家で雑煮を祝ひました。隨分喜んだので今更乍家の正月は好きものと思ひました。毎年書室に注連縄を張りますが何時迄も外さないものですから仕事の能率が上らず弱りましたので本年は元旦から書室に籠りました。勿論注連縄は休止。

淺田一

きのふは寒山寺の除夜の鐘を聞くまで何かといそがしかつた六時起床。先づ戸を開けて國旗を出した。フト見るとドブがきたない。コイツアイケナイ。初ドブ掃除と來た。デモ七時半祝膳に向つて宮城の方に向つて最敬禮の後改まつて「あけましてあめでたう」と云ひ交はすと元旦らしい氣分が涌く。郵便屋さんが勝手口へドツサリ賀狀を運んで「おめでたう」と挨拶してくれる。元旦から一番御迷惑なのは郵便屋さんだらう。有難う御座いましたと厚く御禮を云ふ。こちらからはバルブ節約の爲どなた様へも缺禮してしまつた。然しかう貰つては放つてもおけまい。寒中見舞でも出すか。昨年から東大の櫻に倣つて各專門學校も四大節には祝賀式が行はれることとなつた。朝は女子醫專、午後は男子醫專へ參列。恩師の邸へ玄關まで伺つて見る積が引上げられて御馳走になる。歸つて小供の初さらへだ。

塚越正光

父の代からおとそを祝つたことのない私の家では御神酒の殘りをおとそ代りに祝ふ例になつてゐるので毎年の嘉例の如く御神酒のお流れ頂戴(約一合)で夫婦共醉ひました雑煮三椀(餅は三切)を過ごした頃はお降りも

路郎主幹と蔵乃女史(金田並木撮影)

不朽洞句抄

麻生路郎

鼠の巣にも等しい
長髪の趣味

油斷して
内地の土を踏まず死に

のつびきならぬこと計りなり
五十一

柳川評釋百句

麻生路郎

一家團欒の後芝生に新聞紙など　形水

父も母も、チーチーパツパ、チーパツパのお仲間入りをした事であらう。今はただ靜かに雲が流れるのみだ。

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう　路郎

惡戰苦鬪の三百六十五日を回顧して元旦の嚴肅さを味ふ。これこそ眞の人生だ。眼鏡を拭いて出直す前途に光明あれ。

移轉して釘と金槌たのしめり　有爲郎

バットをふかしながら、椅子やテーブルの置き場に腐心するサラリーマンにこの悦樂がある。

僞らぬ姿ストロー捨てゝ飲み　菊人

われは一介の勞働者だ。われに初戀の味の魅惑なく、われに茶房のアトモスフェアを滿喫する餘猶なし。面倒臭いかなストロー。

ケーブルの一番前に立つ若さ　春巣

上昇々々。雲を衝いて上ぼる。感興は若さである。

借らぬ氣の家も納屋までのぞいてく　烏雀

電停が近く、間數が多く、瓦斯水道の利便を考へ、しかも家賃が安くと借手の希望に際限はない。

あがつたので軒下へ取込んだ國旗を出して賀狀を頂いた方々と先輩方への賀狀を書いて日を暮らしました。柳友への賀狀へ記す句を三句得たのが川柳作家の元旦らしいと言へるかも知れません。

元旦の雨に賀狀の句を案じ
遙拜をすませ雜煮の箸をとり
一合で夫婦が醉へる寅の春

森井荷十

舊臘二十六日先祖の墓參の歸途、一時間餘り古書を漁つてゐて風邪を引き大つごもりには早退け歸宅直に就床。それから寢たつきり正月を迎へた。元日は熱七度八分時々咳に惱まされたとりどりの文言に意匠に戰捷の新春を祝した賀狀、第一便として百八十餘通來る。これあつて初めて新年を迎へた氣分になつた。

前田五健

朝＝氏神參拜、會社の拜賀式へ參列　晝＝一寸寄れよから、兜の緒を少しゆるめ、足許が確かでないまゝ歸ると、内の子、近所の子の双六お對手を仰せつかり初め歡迎され、後ち排斥されて火燵へ　夜＝武道關係の見習士官君の訪問をうけ「入營兵の嗜好上其他を調査上必要でありますが遊興とはどんなものですか」テレクサイ初講話一席後寒風の街へ出る　夜半＝元日を無事に我が家に居る事を自認感謝しつゝ一句を考へたが出ず……夢へ　結び＝何んと正しく詳はしいものでせうが　呵々

川上三太郎

ものごころついてより、僕、元日を終日自家でくらしたのは本年がはじめて。即ち朝、眼さめて銚子二本、晝二本、夕暮二本、合せて六本の日本酒を飲む時のほかは、ただこんこんと眠つてばかりゐるのであつた。但しそんな空前な事をしたせいか目下猛烈な風邪で苦しんでゐる

柴谷宰二郎

早朝鎭守の宮に皇軍の武運長久を祈る。家に居て賀狀書きの他は濱に出て子等と遊び暮し候

村田周魚

除夜の鐘きき乍ら福茶を喫し氏神樣に詣で皇軍の武運長久に併せて一家の息災越年を謝し戻つて神佛祖先禮拜一家打揃ひ屠蘇雜煮を祝つた。午前十時起立宮城遙拜、分家あるじの年賀を受け夕刻迄新春の卓を圍んで快談。川柳家の來賀は杜若君と節魚君の二人一年を通じ元日だけはペンを持たず活字を眼にしません。午後十時就眠。

伊志田孝三郎

昭和十三年一月一日土曜日晴午前九時半起床、父と子のみの家庭に初めてお正月が來た。形斗りのお雜煮がすんで、子が學校の留守を父は獨りでお書初め

母は樂し着せてから取るしつけ糸

我が家に不似合な句が出來たが、本年の初句である、禮子はとも角、昨日まで、一日に三回位ひ座敷で、穿いたりかむつたりの新調の靴と帽子と、服といよ／＼今日から本式に身に着けた嬉しい顏。はね廻る元氣な姿我家も先づは目出度し目出度し午後四時、吉例通り靜岡の樂瓢兄初詣にて立寄らる。

お茶家へ屠蘇を汲みにゆく。福の家の八重さんにお酌をしてもらふ。夜は靜かに更けて、もう元日は終る樂瓢兄を名古屋驛に送つて歸宅。禮子よ夢安かれ父も平和な元日を濟ませたよ。

愛だなんてみんな苦勞の前借りだ

よし江

そこまで考へては人生は無味乾燥だ。しか信ずる以上神の愛に永生すべしだ。

曾我廼家に泣く涙あり貸さぬなり

三巴

一分や二分で首をつらいでもといひ、心中をする位愛してゐたのなら添はしてやるのにといふ。人間は遂に人間だ。

初日の出砂に子の影親の影

小刺紅

大自然の力はすべてを淨化する。子の影と父の影との相交錯するところに無限の愛は湧く。

こう〳〵醫者も安心立命を說き

雅幽

生死の問題は醫術の外に横はる。醫者も患者も共に力の盡きたところに掴むべき藥すべはある筈だ。

贅澤をしつくしてから虫と居る

自樂人

富貴は浮べる雲だと古人も云つた。虫の音は自然の音樂だと、これも誰やらが云つた。俗世間を遁れて何を求めるかは大きな疑問だ。

寢る時間さへ惜しみなく贈賄か

明珠

歌ひたくもない唄を歌ひ、飲みたくもない酒を飲んで歡心を買はねばならない贈賄が、晝から夜へ、夜から朝へと續く。花街ために黃金の火華散る。

松の内屏風をたゝむ風をうけ

日車

部屋は仄暗く、廊下は黑光る。行儀作法に明け暮れる身が、屏風の風を感ずるも憂し。

辭職して何をか云はん植木鉢

五葉

恩給に縋つて死を待つばかりだ。今更何を僕に聞くのだ。

獨りでにあふれた水の淸いこと

柊花

口をそそき、齒を磨がく、たら　たら　たら　たらと果てしなく筧から流れてつきず、もたいなし山水。

こんな傷ぐらいと指は無かりけり

沐天

資本主義、機械禍、そんな文字が私達の頭をかすめてゆく。生きんがための犧牲、脚や腕がマネキン人形を轉ろがしたやうに横はる生活戰線はいつになつたら朗らかになるだらう。

月あれど山あれどいま君は亡し

善弘

生者必滅會者定離。あゝ、寫眞は默して語らない。多情多恨はよし、されどメランコリーの罐詰いつまでか續く。

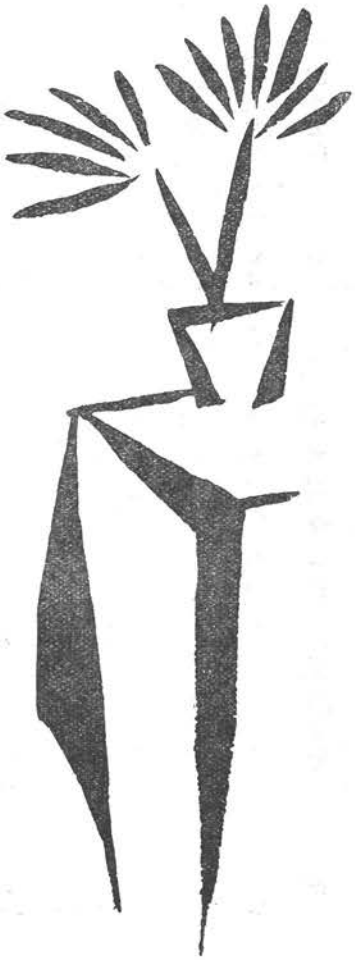
輝くや元より金に嫁せし身の

劔花坊

父にも等しき夫の年齡覺悟の上なり、玉の輿とそしらばそしれ嫁して需むるものに千金の綾羅は必然の必か。

近作樽柳

麻生路郎選



栗島だ田中だ表紙もめて居る　愛媛縣　由利　孝輔
寒行へ今日は試練の雪となり　同
商用に譽の家へかしこまる　同
炭一つ注ぐにも北支思ふなり　同
萬歳の叫び喩に熱いもの　同
鞭撻を願つておいて寄り付かず　大阪　北川　春巣
プラットのラウドスピーカー無表情　同
看護婦ら又ぞろ笑ひ始めたり　同
暇ですと云うて謙遜した積り　同
物忘れ傘を忘れた例を引き　同
船大工何所にねるのか唄ひ出し　松江　田中都之介
派出造り風呂敷にまで行き屆き　同
氣が付けば佛間は母の獨りごと　同
慰問品代に異議なし支出欄　同
弔問の鈴か夕刊配られぬ　同
片鱗を見せてやつぱり親子なり　今治　長野　文庫
鶴に似た氣品ステツキよく似合ひ　同
ヂリ〳〵と母の意見が攻め寄せる　同

旗色はハツキリさせぬ平社員　同
ミス日本ライトへ上げる脚と成り　大阪　石田　沐天
ひねくれた君へ世相がまた變り　同
鐵則がもろく溶けゆく金儲け　同
はなやかに損を續けて灯に踊り　同
お針娘の今日は片袖だけで暮れ　愛媛縣　荒井英賀夫
日蓮宗面白そうにたゝくなり　同
ヴイタミンABCDみなほしや　同
鐵瓶はシヤン〳〵遊ぶ友も來ず　同
ストーブは去年の雪が話される　大阪　畑田よし江
好きだからと口で云へずに笑つてる　同
心境の披瀝自己尙淺ましい　同
みな嘘を言つてゐるのか氣が廻り　同
見學はあつちこつちと聞きたがり　名古屋　平田　素天
雜煮餅細かく切つて數を食ひ　同
三等に乘るは零落した異人　同
樽洗ひ共同栓を獨占し　同
紅提灯街の廣さになつてゆき　盛中　宮内　耕朗

何もかも忘れる程は呑めぬなり　同
秋風の中にキリ〳〵貸家札　同

大甲溪上流

兩岸の紅葉せまつて舟速し　同
妓の嘘を信じてみたい夜もあり　尼崎　酒井　斗風
銃後なり力を書いてバスに乘る　同
耳鳴りに炭のはじくが氣にさわり　同
看護婦の電車で會へば娘らし　同
冗談も言へて下から親しまれ　愛媛縣　酒井　肱水
無禮講甘黨輕く侮られ　同
偶然をしきりに嬉しがつて飲み　同
一徹な父斷りへ理くつめき　同
圓滿は寫眞にうつる程でなし　大阪　富本　無煙
金網の猿淋しそう菊花壇　同
蕎麥を打つ天井は蜘蛛の巣にまかせ　同
襲名へ年寄りくさい名となりぬ　同
十二月街々々の灯が挑み　大阪　古寺謙南坊
若芽寶互に出逢ふ橋があり　同
ひたむきな心へ意地があるばかり　同
女學校だん〳〵街に圍まれる　同
体溫計一分上つた二分ひいた　大阪府　川村　觀月
一個人となりて寸暇に師を訪ね　同
外交員外交員に借があり　同
明日飲む友から來てる年賀狀　名古屋　稻垣　正穗
末つ子へ一枚來てる年賀狀　同
妹の客へ母親芋を買ひ　同
まなざしは既に戀知る乙女にて　長野縣　林　幹

どの道も結局墓地へ續く道　同
兵兒帶が段々締まるトロロ汁　同　大阪府　宮岡　公子
友の口借りて斷る十二月
ヂフテリヤ病院の壁白いなり　同
隣りの兒を泣いて叱つてゐる若さ　同　尼崎　山田南濃路
惚れた眼に女の衿がまたかわり
千載一遇遂に護國の鬼と化し　同
ハンモツク次男の寢間の上でゆれ　同
集金へ又あご髭を拔き初め　大阪　岩橋最美地
年の瀨は越せると決めた繩のれん　同
この腕に妻と小犬が居を構へ　同
髭剃つたまゝ日曜を寢てしまひ　兵庫縣　酒井美知夫
年賀狀夫人の齡が知れるなり　同
サーカスの娘に冬が迫るなり　同
又春が來るぞマイクへ除夜の鐘　愛媛縣　岡田　浮草
戰捷の便りへ屠蘇の膳を据え　同
ニュース館老婆も會へる氣で出掛け　同
良い相手など〻兩軍勝つ氣なり　愛媛縣　米澤　曉明
お茶に花緣づくまでの遊び事　同
甘黨はじり〳〵次の部屋へ來る　同
ボーナスで虛榮の何割かを充たし　大阪　米谷松太樓
商人の嘘も主人に教へられ　同
なる樣になると放任主義の父　同

おどかすなベルは社長の孫が押し　高槻　石手　河鹿
公休と解り鐵瓶水をさし　同
軍配に迷ふ仲裁頼まれる　奈良縣　鳩田　翠峯
嫁きおくれだん〳〵派手な柄になり　同
シャンデリア解消の緣とは知らず　大阪　西尾　栞
染見本姐さんが來て迷ひ出し　同
警官にうつむきがちな過去を持ち　豐中　金田　並木
一等賞當てたをスリはつけねらひ　同
狸でも出そうな晩だ薩摩汁　下關　櫻井　不水
女房も鼠の根に草臥れた　同
思ひ出せぬ眼を電燈へ向けてゐる　布施　福井　尺琴
おあたりと言はれてやつと物が言へ　同
ターキーの笑つてくれた騷ぎなり　東京　風間　花盈
でも無事を皆んな笑つて荷をほどき　同
米を研ぐ妻に主人は傘をさし　下關　多田市他樓
正月を武器に子供は使はれる　同
ウインドの人形さんも羽根をつき　大阪　竹内美津枝
はじかんだ手をお密柑がすべり落ち　同
片言の言へる子と待つ譽の日　松江　刈田　青士
置こたつ足が長いと思ふなり　同
占領の號外氣前よく呉れる　豐中　丸橋　松雨
軍事郵便近所へ話す誇らしさ　同
卒業へ今日から部屋が一つ空き　大阪　田中　風葉

禮狀へ書く忘れ物女文字　同
泣き聲に地下足袋をぬぐもどかしさ　廣岡　乾　幸子
乳母の里たづねて來れば蕎麥の花　同
愛人の賀狀封書で遲くつく　名古屋　花岡　堯子
金出してくれる伯母さん一人者　今治　渡邊都留逸

友人遭難變死を悼む

整然とされてる部屋よ君の性　大阪　野本　呑水
軍服を着た子等も居る初詣り　大阪　富岡　巨人
婦人會ハズの噂の捨てどころ　長野　佐二木千隈
見舞金受けて當座は無事な顏　尼崎　飯尾寄與史
南京に近い戰死の口惜しさ　大阪　山本　葉光
ポケットへいくらか殘る暗い道　丸亀　馬場　溟二
踏切りで輕い別れにたのし明日　廣島　奥富　天作
ダットサン後姿をちと憎み　朝鮮　弘津　慶一
お電話に惜しいラヂオも止めさゝれ　大阪　竹内　春坊
師走空電車と並び舗道行く　大阪　吉本　淺路
女ふと淋しくなれり廿納豆　奈良　山上　由
待たされる應接雲の見える窓　大阪　神戸　幽山
陳情の代表髭のある男　岡山　半田　春二
挨拶に先を越されてハツとなり　番北　松並　一
回禮にうす茶うや〳〵しく出され　大阪府　崎山　登
ハンドバツクと詩集を乙女しかと抱く　大　段谷　山紫

武玉川三編研究（十三）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(200) **きしむ戸を踏放されて雲の峰**

秋の屋＝夏の突天に板戸が反つたから、それを踏放つのであらう。踏放つは蹴放つの意と思ふ。

東魚＝獨り者が歸つてきた場合のやうだ。家根の棟を壓するやうに雲の峰が、聳立つて居る光景であらう。

省二＝雲の峰への感じは出て居る。—類句ではないが『伽藍の雨戸蹴たり踏たり』（武●六）

(201) **殘らす紅ミのわたる看病**

秋の屋＝昔は眼病患者が、紅絹の裂を使用したものだが此の句は看護人に、紅絹を渡すといふので、その意が全く判明しない。

東魚＝大名などの小兒が、疱瘡になつた場合ではないか。皆看病人に紅絹の上ツぱりでも、着せる爲にやるのではないか。

省二＝私も疱瘡と解して置いたのであるが。

秋の屋＝疱瘡患者の看護人が、紅色の衣類を着ることは無からう。

(202) **破軍の下を歩行傾城**

秋の屋＝「破軍」は、北斗七星いはゆる大熊星坐中の、七個の星の先頭にある星で、これを俗に破軍の劍先といふが『倭漢三才圖會』には、「第七搖光爲破軍之劍鋒、而諍論勝負對坐人逆向之、則有事爲不利、好事者動則考欲不向手劍鋒也」とあつて、危險な星であるから、其下を歩く傾城も、亦一個の危險物だと云ふのである。但し實際に傾城が星の下を歩くのではない。

東魚＝傾城が危險物だと云ふ意にとると、「破軍の中に据る傾城」とでもあり度く思ふ。傾城が危險な目にあひ易いとの意ではないか。いつ戀の恨の刄を受けぬとも知れないと云ふ風に。仲の町の道中など甚だ危險だと云ふ風には考へられまいか。さすれば「歩行」くも明らかになると思ふ。

省二＝私もその樣に思ふ。華やかな生活ではあるが、頗る危險な環境裡にあるを云ふ。『破軍へ向ふ船の小便』（金砂子）の「向ふ」は建す事になつて、陰陽家の大に忌む事にあてはまる。

(203) **三條へ出て元トの氣違ひ**

秋の屋＝瘋癲病者が閑靜な山里などへ行き、其處で治療して快癒したから、京都の實家へ連歸るとて、三條大橋まで來ると、往來の人が雜沓するので　再び發病したといふのである。

東魚＝比叡山の方面閑靜な地で、靜養してゐたのであらう。清瀧、黑谷、若王寺などから戻つて來たやうに考へられる。多少作爲はあるが面白い句。

省二＝句と反對なのは『三條へ出て輕いロ聞』（武●七）若王寺といふ文字が出たので思出すが、若王寺の手前に、瘋癲患者の收容所があつた事がある。

(204) **勘當された一周忌來る**

省二＝勘當されて居る中に、親の死に會ひ、その一周忌がきたのであらうか。勘當の句例は死の枕元で許るされるものが多い。

秋の屋＝今月今日が丁度勘當された、一週年目に當るといふので、それを一周忌と云つたまでゝある。

東魚＝一周忌は洒落れと思ふ。

(205) **合口の友に成るなら御納戸茶**

省二＝「合口」とか「相口會ふ」とかは、氣心の會ふ事「合口の友」は親友の意。御納戸茶で、ある種の人物を表現して居るのであるが詳かにせず。御納戸茶の着物は寶暦時代に大流行をなしたのは、吉宗將軍が好むで用ひられた關係に因る。親しい友達などは、お對の浴衣を着たりする如くに、御納戸茶を用ひたのであらう。裏、表共に御納戸茶づくめの程流行した。契情極秘卷に、「御納戸茶裏變じて花いろとなり……親和と織込ンだるはゞ廣帶」この合口の友は、所謂惡友の謂ならむ。—『除けて行人の心に御納戸茶』（武●九）

秋の屋＝所謂馬の合つた友で、惡友とも成り善友とも成る。

東魚＝前句あれば味が充分にならうと思はれるが、單に馬の合つた同士は、流行を揃ひに着るとだけで、興が薄い

(206) **棒を習ツて憎い口聞く**

省二＝棒術にも流儀はある。八角にした八尺（半棒もあり）位の棒を用ひて、攻擊防備に役立たせる武伎の一種で、足輕などは修習した。棒法を習つて生兵法の高慢な憎まれ口を叩くのは、近頃は拳闘初心者などにあると同じだ「われと思はん者あらば、某が棒先に當つてみよ」（雪女五枚羽子板）。これが一手習つた氣焰である。

秋の屋＝大傷の基慎しむ可し〳〵。

東魚＝高慢を云ふ人物が、棒だけに可笑味がある。「憎い」といつても御愛嬌である。

(207) **翌京と言ふ近江路の心持**

省二＝『大津からあのおしやんすを聞きはじめ』。愈々明日は『雲井まで上るはしごは五十三』の京着の心嬉しさ『大津まで來て蘇生る人』（武●四）。『大津伏見は京のとめ袖』（武●十三）

秋の屋＝汽車の旅でも京都驛ときくと、車窓より首を出して、東山などを遠望するものだ。

東　魚＝數日の旅寢を重ねてきてこそ、翌は愈々京都だといふ心持ちが深い。一生に一度は見物したいと思つた京へと云ふのであるから、今日の便利な時代よりは、ずつと深い喜びの心持ちであらう。

(208)　**茅の輪を　拔ける　不拍子な顏**

省　二＝『茅の輪越すとうごく唇』（武●十三）。『茅の輪を拔て賴む綻』（武●十一）など、武庫川には茅の輪の句は、かなり見出す。茅の輪の作り方もいろ〳〵あつて、股ぎ憎いものもある。拔ける時、何んとなう拍子が惡い。（茅の輪の意味の上からも、亂暴に勝手に拔けて足るわけではなく、一寸でも考へさせられる樣な心持ちも起るであらう）拔けつゝ間が惡い樣な心の落ちつきがあつて、拔けてしまふと振返つてみる、「うごく唇」となる。

秋の屋＝何となく嚴肅な氣が起るので、不拍子な顏にも成るであらう。

東　魚＝不拍子の意が、どうも明瞭でない。調和のとれぬといふ意か。感興もなにも一向現はれてない無表情といふ意か。私の近作に『藤の晝顏セ固く巫女舞へる』があるが、さうした眞面目に面のやうな動かない、顏付といふ意であらうか。

(209)　**髮際に　無理の殘る　疊染**

省　二＝黑染姿で頭を丸めて居る、その生際が、何んだか目立つて氣になる。

秋の屋＝意餘つて詞足らぬ句であると思ふ。

東　魚＝「かみきわ」であらうか、字餘りになるが、何とか讀み方がありさうに思はれる。

秋の屋＝「はへきは」と讀ませるのであると思ふ。

東　魚＝「はへきは」にしても字餘りであるが、字餘りはどうも變だ。字餘りにする筈がないやうに思はれるのであるが。

(210)　**おもひ　錆付く　お物師の　針**

秋の屋＝「おもひ」は重い歟。思ひ歟。多分は前者であらうが、重いにしても其の意が判明しない。

東　魚＝お物師と云へば、高貴の衣裳を縫ふのであるから、一本の針に少しの錆が出ても、重大な事である。恐縮千萬な事である。と云ふのを、かく、おもい錆が付く、即重大な錆がつくと云ふ風に詠んだのであらう。

省　二＝？。物思ひの憂欝さの爲ではなきか。

秋の屋＝追考。江戸の末期に、駒込御林（現今の林町）に住む、幕府の御鷹匠同心某の娘が、千代田の大奥に上り、呉服所の御物師を勤めるうちに、朋輩に憎くまれて、自分の使用する縫針一本を隱匿された。この針には德川家の紋章が刻印してあつて、大切に取扱はれるものであるから、そのまゝに差措く事が出來ず、呉服所の數十帖の疊の表を剝いて搜索したけれども、發見されない故、その娘は三晝夜不眠不休で、尋問されたが、只知らぬ存ぜぬと答へるのみで、遂に服罪せぬので、自宅へ其身を引取らせて、長く蟄居させる事となつた、と云ふ實話がある。これは此の句を解釋するに、參考になる事と思ふ。

東　魚＝愚說がこれで、裏書きされたやうに思ふ。

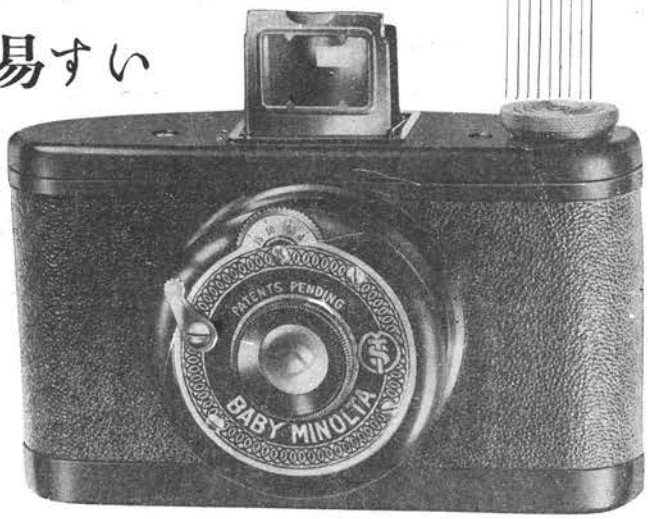
(211)　**むかしの事を　思ひ切る　親**

秋の屋＝息子が生長したならば、俺は隱居して左團扇で暮さう、と思つてゐたのだが、何事も理想の如くには行かず、長年の希望を棄てねばならぬ。

東　魚＝恐らく前說のやうな意味合であらう。

省　二＝二說考へてゐた。（一）は前說通り、（二）は息子の代になつてから、年と共に家運が傾くのみで、自分代の旺むなりし昔を憶ふと、愚痴の種許りであるが、一切因緣だらうと思ひ切り忘れてしまふ。

手輕るに
寫し易すい
ベビー
ミノルタ



¥ 9.50

ヴエスト判
3 × 4cm判 兼用

速寫ケース　¥ 2.00

カタログ進呈

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

淺沼商會
東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

★日本柳壇百人撰★

2597年の金字塔 自選一句 ABC順

豊中市 阿部閑生
親友の手でかばはれてマッチ摺り

東京市 阿部佐保蘭
加茂川の石で友禪押えられ

大阪市 麻生路郎
千人針胡瓜抱へた手でも縫ひ

大阪市 麻生葭乃
魂の創世記はこれからですの

大阪市 朝田新水
極道もいざ出征となる笑ひ

靜岡市 榎田竹林
スパイなぞ有るかや歡呼この歡呼

京都市 藤本蘭華
朝の風今日は要らない鯨尺

横濱市 福田山雨樓
父いつも牛と一緒に起きてゐる

東京市 古谷盈光
掃き終へた土のいぶきと我息吹

東京市 富士野鞍馬
日章旗此處は祖國を一千里

青森縣 後藤蝶五郎
富めるもの兩手に餘る子供の手

大阪市 堀口塊人
青春すばらしく長城に立つ戰士

京都市 平岩司郎
ビルの空淑女は靴を磨きません

大阪市 橋本綠雨
軍服の子を探すのに手間がとれ

仁川府 池田可宵
ふと醒めて四ツの寢息きいてゐた

名古屋市 伊志田孝三郎
淡雪は逢ひ度くさせて消えてゆき

大阪市 石田沐天
パツト咲きパツト散るのもテンポかね

輝く戰捷

謹賀新春

和田天民子
東京市杉並區方南町四二二
電話四谷二〇九二番

大島濤明
大連市西公園町川柳居平洞
自宅電話三七一三番

森東魚
豊中市櫻塚一一〇四

森井荷十
東京市下谷區坂本町一丁目六番地三號

齋藤旭映
名古屋市中區西日置町出先五〇
電話西一八七八番

今治市　石崎柳石
目をつむる顔付もよし子は乳に

横濱市　磯部天邪鬼
淋しさを心いつぱい冬の水

山口縣　礒部孔雀
一機二機おゝ日本の飛行機だ

西宮市　岩崎蟬古
舞臺空虚友田恭助戰死せり

松本市　石曾根民郎
さびしさに克てぬ雪空屋根も寥た

大阪市　加賀破竹
女房を呼ぶ淋しさを感じつゝ

長野縣　金井有爲郎
葉はみんな散る相談をしてゐるね

上田市　金子呑風
女の子眞似る胡座も叱られる

東京市　川上三太郎
人一人生む家白く明けかかり

東京市　河柳雨吉
違つてた肌着を笑ふ姉妹

京都市　紀二山
日本に住む有難さ日章旗

大阪市　岸本水府
白だすきそも日本は昔より

東京市　熊澤車山
仕事着の友と茶房の隅を選り

東京市　三浦太郎丸
神様が呼んで呉れたか野犬の死

東京市　村田周魚
出征へからりと晴れた赤蜻蛉

松山市　前田五健
日を拜む心大内山浮び

豊中市　森東魚
引越しの自分で曳くは二階なり

大阪市　森雞牛子
大捷に皇后さまの色紙掛く

兵庫縣　水谷鮎美
俗物と言ふ肩君も醉ふてるね

東京市　森井荷十
忙しさの一瞬遙けき友を戀ふ

大阪市　村松夢裡
サンプルへ食傷の顔いと貧し

名古屋市　丹羽のぼる
腑甲斐なき友達ばかり秋の風

兵庫縣　長崎柳秀
たべものは大阪だつせさうだつせ

輝く戰捷

謹賀新春

喪中に付年末年始缺禮仕候
伊志田孝三郎
名古屋市中區幸樂町二丁目
電話瑞穗局（73）四六〇番

信州湯田中温泉
湯の村發行所
柳風會
電話湯田中十七番

やつと改號いたしました。改號するくと騷いだだけに珍の字が削つただけでは一寸拍子抜けの感を抱かれる方も、お有りでせうが、どうぞ今後とも倍舊の御風交の程偏にお願ひ申上げます。（竹）
靜岡市寺町四丁目
（珍竹林改メ）榎田竹林
榎田柳葉
榎田孝坊女
月刊 靜岡川柳——一部金拾錢

杉原大研子
大阪細菌研究所
大阪市北區萬歲町
電話北三〇六八・六一〇八

今川椋影
愛媛縣大洲町

川出美根子

高知市　中澤濁水
フロックに識らぬ名刺の三ヶ日

大阪市　西田艸樂
見送つてその五分刈を眼に殘し

大阪市　永先芽十
感激の歸ると我が家にも國旗

長野縣　中島紫痴郎
千萬年變らぬ岩を撫て見る

大阪市　小田夢路
銃後なり軍歌の外に歌はない

大阪市　小川百雷
また少しあはてる癖を矯めんかな

大阪市　小川舟人
どこからか戻る氣がする日章旗

大阪市　近江砂人
わが禪は相聞の句を作るとき

京都市　大島黄子朗
旅人櫛を拾へり

京都市　大島無冠王
一切を捨てゝ起つ日に巡り逢ひ

松山市　酒井大樓
すり切れる身へ精魂へ酒が有り

京都市　齋藤松窓
父と娘が火をおこしてる淋しさや

東京市　齋藤丹三郎
子のお辭儀舊友の膝直させる

石川縣　櫻井六葉
手袋もゴム靴も雪もあたたかく

神戸市　三條東洋鬼
秋の灯を守れば鼠さへ親し

東京市　清水米花
朝の太陽が雀と子等を生む

東京市　品川陣居
利口ものそれで情けのあるお前

東京市　白石維想樓
海の幸山の幸秋の大八洲

大阪市　須崎豆秋
サイレンの正午があとやさきに鳴り

名古屋市　鈴木可香
海で見た月が大きい綴方

輝く戰捷

謹賀新春

村田周魚
東京市豊島區高田本町二丁目一四六七

（福造ハ自然消滅）
蘭華
京・姉・鮫・角藤本方
本名は（福次）

冨士野鞍馬
東京市麴町區五番町七番地

小林不浪人
青森市浦町橋本二八三

前田五健
松山市眞砂町

石崎柳石
今治市城山通
みすか吟社中

蛭子省二
朝鮮光州府本町四

春以來の御無沙汰をおわび致します、今年はウンとその償ひをするつもりで居ります。
朝鮮・池田司宵

川柳飜譯研究會
阿部佐保蘭
東京市小石川區初音町四
電話 小石川 四八四一番

關西不動産株式會社
大橋龜男

龜井晟修
函館市青柳町五〇

中澤濁水
高知市本與力町

神戸市　鈴木九葉

ひよつとこの面へ眼が行く春の酒

大阪市　杉原大研子

非常時を小さき胸にもつ覺悟

大阪市　高橋かほる

碁に勝つてやとなを奢る汐の宮

大連　高橋月南

合掌の出來る人間の有難さ

長野縣　高峰柳兒

山羊連れて農夫ひとゝきの憩ひ

東京市　高島玉兎朗

歡送の祝辭に堪へし父と母

東京市　高須啞三味

父送る子は萬歳に涙耐へ

青森市　田澤有石

盃は日本人のこゝろもち

京都市　辻井京二

逢狀の嘘へつき出しからになり

東京市　塚越正光

人混みをよけずに歩く醉拂ひ

高知市　筒井水魚

乾盃の氣分にならぬけれど起つ

八幡市　上野十七八

子を抱いて國旗を力強く見る

東京市　山川花戀坊

物價が騰つた子供が泣いてゐる

東京市　山路星文洞

涙の重さ灰に滲み込む

大阪市　山本丹路

表情を殺してYES・SIRと言ふ

横濱市　山本斗酒

ひとり酌む安らかさわが影法師

大阪市　柳大門

グレシヤムの法則だよと鹹が云ふ

東京市　柳三門

即心即句元日の陽を見てる

東京市　八十島勇魚

突擊の咄しがはづむ藥風呂

新京　安井八翠坊

南京を落して春を待佗びる

金澤市　安川久留美

垣も鍵もなく水の上水流れ

名古屋市　吉田水車

春風や孕み女の無表情

『日本柳壇百人撰』の出句者にかなり變遷があつた。應召された人々の回答は得られなかつた。從つて百人に充たなかつたが歴史的事象として補缺しなかつた。頑張る大家に敬意を表し、新進の飛躍に乾杯を送る。

輝く戰捷

謹賀新春

中見光路 大阪市西成區粉濱西之町三ノ三	金井有爲郎 長野縣湯田中温泉湯の村編輯所	小川百雷 大阪市西成區北吉田町十三番地	弘津慶一 朝鮮全北金堤本町	岡田浮草 愛媛縣越智郡菊間町	塚越正光 東京市芝區田町九丁目十三番地
矢野虻の麿 松山市外道後樋又	山田有町 愛知縣犬山町練屋	石田沐天 大阪市西區阿波座下通一ノ三二	正木琴舟 大阪市東成區北中道町二ノ八	某	安川久留美 金澤市石坂與力町

川柳塔

路郎選

大阪麻生葭乃

草に寝て今日もあしたも人間ぎらひ
カンカンにかけました人間の聲と鳥の聲
お茶おごる優越感の瞳の藍き
睡眠劑に酒をゆるされ診察通過

大阪橋本綠雨

女にも股火をすゝめ笑はせる
懷手空財布とは云へぬなり
軍馬まだ橋を渡らぬ音をきゝ

大阪高橋かほる

朝風呂へちよこ〳〵と來る風呂屋の子
世話好きの月謝の高も聞いて置き
パンフレツト置いて庭からすぐ歸り
塗り忘れみたいな虎に白い所
米俵猫はしばらく寝に上り

大阪西田艸樂

南無三寶二人で行つた切符が出
氣にかゝる噂に來ればもう居らず

尋ね人こんな露路とは思へども
十二月圍はれの身も滿を持し

○

大阪府朝田新水

不男に何を見込んだ本三荷
老幼の一致は古い軍歌なり
紹介の名刺社長に會へずねる
三十の繼そのまゝに間借して

兵庫縣水谷鮎美

酢のものを母がすゝめた十二月
僞りのおほきに犬も尾をふらず
古物商陽のなかにねて錢勘定
借金のことわり鼻がつまるなり
寒椿手紙を書けば陽があたり
燒栗はうまし出店に冬の雲

大阪北山悟郎

朝風呂の其日曇つて居た眼鏡
萬歲の聲に朝寝の床を蹴り
海軍機支那の廣さを當つて見

名古屋吉田水車

戰捷の旗そのままに春は明け

祝南京陷落

皇恩に支那の烏も安堵する

祝I君入營

ペンだこも今日より銃にふれてよし

大阪須崎豆秋

丸髷に結ふてボーナス奪りに來る
元旦の鋏を入れた車掌さん
お正月犬も疊へ上げてやり
正月のものはパツパと札で買ひ

大阪府妹尾變人

膺懲のさ中尊く君は散る
戰勝の春へ勇士の子を抱いて
仕送りに意義があるのも十二月

大阪府宮岡白峯

飛車押して行く計畫も暮れんとす
借間札銃後を守るなと思ひ
裏街の聲で見送る入營旗
丸乾と梅で銃後を守りゐる

松本石曾根民郎

われ若くして髭も子もあり年新た
小抽斗をとこの夢はいぎたなし
善人をけなす手筈も揃ふたか

大阪市塲沒倉子

喜びのこの日灯の海旗の波
銃後の護り一時の熱と化すなかれ
事變から暇でとオチヨヤンまでこぼし
箸つけぬまゝ勅題の料理凍て
歲末の風あれ知らずばかり賣れ
月給のほかはなんでもかも騰り
創案も批判も妻におされ氣味

大阪大西八歩

午睡さめて無花果の實の無表情
兩膝をそろへて秋の風にふれ
丸刈の尊とさとなる赤だすき
水の情熱百度で湯氣さ
良心の曇らぬ朝を嬉しくゐ

大阪西いわを

見送りを女中に委し咳一つ
箸紙を書くに子供の圓くなり
旅行中會議中とて斷られ
陷落に鐵の扉を背に撮る
ボーナスで引かれる覺悟献納機

庭番も箒をかへて明けの春
惠方はこちら赤で書き黒で書き
四枚一組田舍娘の春姿
置炬燵晴衣のまゝの足を入れ
玉砂利へ右と左の音がする

大阪 中西おさむ

先生に自轉車をりて叩頭する
税金を拂はず權利主張する
十二月だけの商賣して見る氣
資本家になれと理想を挫かれる
蔭膳は北支戰線異狀なし
定期の切れた申出長男長女次女

大阪 後藤青兒

鍵かけたところへ貯金頼みます
健康な素肌素足を羨まれ
請求書コーヒ代とてあなどれず

廣島 鳥生古弗

子を連れて行けば市場が高くつき
氷點下北支の噂子の噂
陷落へ襷がけなり提灯屋

大阪 加藤ライト

凧一つ師走のビルを越えてゐる
弔慰金こんな女房を後家にして
人を呑む水とも見えぬ美しさ

大阪 丸尾潮花

牛乳が熱い親子の朝せはし
それ〳〵にハンドバックを持つて春
市場が出來る敷地へ猫を捨て
足袋干して女氣のある窓となり

大阪 正本水客

信號を待つ先頭はダツトサン
この後でまだ死ぬ人がある三原山
また次へ廻す歳暮が届かない
來年も悪い暦を買つて來る
少しだけあたる炬燵へ寢てしまひ

大阪 黒川紫香

此處いらが蓮の臺とあきらめん
海を見たとたん燈台の灯がついた
今年まだ賀狀の事に及ばざる
院長について看護婦ドアを閉め

長野 金井有爲郎

南京陷落怪しからん株成金
寶れる〳〵たらひ廻しになる砂糖か
因緣をつけられそうな街歩く

大阪府 大坂形水

冬の農夫のぐち聞く爲の茶によばれ
槌の音から夜があけるうれしさよ
娼婦の笑ひがラツパの如くひびいて來

松山 矢野虻の麿

○

軍事郵便書初の筆を執る
年賀狀出せよ出すなと云ふおふれ
具体論傍聽席が欠伸嚙む
山下りた和尚から聞く雪の事
用心のよさを嘲笑する若さ
馬鹿な支那やなと十八史略讀む

松山 酒井大樓

手術台金と命を換へました
萬歳萬歳命をひろた鐵兜
學友は皆良い肩書の年賀狀
齡三十我は不肖の子なりけり

南京陷落

非常時の朝の街燈消して出る
非常時の春國産の方を買ひ
薪買つて來て出征の友へ燻べ
腕組んでマダム外國の話なり

東京 阿部佐保蘭

開店の朝なり一家身構える
不機嫌へ君子危きに近寄らず
日向ぼこ子供の爪をつんでやり
もう五分五分の留守を待たされる
國産機響殘れる空に立ち

愛媛縣 今川椋影

出征を送る踏切からの歌
散髪をしてボーナスを戴けり
働けと云ふサイレンか十二月
人形を飾りタイピスト打ちつづけ

廣島 植山九天

日の丸を出して銀行休まぬ日
命知らずですと桶屋は底を見せ
畦道へ出て北風の眞正面
戰線の兵を想へと一時打つ

愛知縣 山田有町

質問が眼鏡へ飛んで來さうなり

今治 渡邊曉童

月は今粉盜人を覗くなり
軍事扶助とらねば損の樣に云ひ
動員が來るぞと雨の稻を刈る
モンペイに銃後の鍬は錆さゝず

愛媛縣 橋本克海

★柳人素描

（一六）梅本秋農屋君

「川柳雜誌」に武玉川研究を多年發表し續け古川柳研究家の權威として謳はれてゐる梅本秋農屋翁は川柳家中の最高齢者であり、今こそ作句を見せられぬが現代で一番古い川柳家である。明治廿三年十月に刊行された「柳風肖像狂句百家仙」といふ書の二丁の裏に掲げられた柳齋とがねこそは梅本秋農屋翁のことである。

翁は明治十五年十月、川柳に手を染め、甲申（明治十七年）の冬、七世柳翁の門に入り此の道に遊ばれたのである、又狂歌も好まれ安倍川望成の名で有名である著書も多數にある

翁は文久二年九月廿七日東京に生まれ今もなほ下谷區谷中初音町に居住されてゐる。本名を高節、雅號を秋農屋又は座山と號せられ別號を安倍川望成と稱される。職業は初、質屋、後、銀行員、現在は無職である。夫人梅本飛梭子女史も早くより翁に學んで作句されてゐたが既に故人となられたさらである。著書としては川柳雜句評釋外數種。川柳人協會名譽會員。

（一七）小林不浪人君

青、廈親善川柳大會の立役者として名をなした不浪人君は見るからに政治家タイプのガッチリした男だ。しかも意氣の男だ。川柳「みちのく」一派を率ひて東北に君臨すること多年、全國にその名を知られてゐる。

君の句作は明治四十三年の春三月からはじまる。

川柳人協會主催・大阪朝日新聞社會事業團後援

同情週間

師走川柳大會

（入選句發表）

大會實況十二月號參照

兼題　祝酒　堀口塊人選

言譯は僕がしてやる祝酒　柳笑
祝酒隅にゐるのを引出され　龜楠
祝酒　壓　壕　の　人　涙あり　草水
祝酒戰勝ニュースかけたまゝ　紫香
祝酒こぼれる程に酌がれたり　雀踊子
祝酒うれしい喧嘩してるなり　聞路
支那酒で祝ふ兵士の髭濃うし　斗風
老將の笑顔も見せた祝酒　秀峰
一杯の酒分けあつて占據せり　ゆきひろ
祝酒丸い空氣をそこねまじ　夕鐘
床の間に軍刀がある祝酒　豆秋
祝酒酒量かくされそうもなし　有町
酩酊の父號外は子の部隊　としみ
ことはれば祝酒だと無理につぎ　兎踊子
出征の酒當人は酔つてゐず　啞三味
凱旋も眞近に迫るこもかぶり　閑古鳥
部隊長の瞼が濡れる祝酒　正胤
祝酒に師走の街が面白し　靜路
祝酒朝から障子を開け放し　新水
城壁の日の丸高く酌み交す　星花
乾盃をじれつたく待つ椅子ふたつ　柳秀
赤襷いら〳〵待つてる祝酒　葉光
電　文の　簡單すぎる祝酒　喜彦
祝酒朝日の中で又つがれ　鎌南坊
祝酒一杯だけをうけて逃げ　風葉
祝酒酔ふて歸つて寢るばかり　方水
祝酒母戰傷のことに觸れ　兎耳
花嫁の持てあましたる祝酒　青兒
祝酒ひとり歸つて座がくづれ　水客
祝酒けむたい人はとうに去に　蘭華
祝酒祖國の方を向いて飲み　金愚
目出度いのですと無理から呑まさたる　ライト
盃の來るのが早い祝酒　かほる
空風の音も嬉しい祝酒　白峰
たくましき腕が揃ふた祝酒　鮎美
祝酒此の大盃をどうしよう　黄波
祝酒軍歌となつて露路を抜け　五黄子
喜びの酒が小さな波になり　小松園
號外を手に立呑の賑かさ　三代吉
祝酒とう！〳〵母も呑まされる　水染
祝酒暖房裝置焚きすぎる　柳千
祝酒するめの足を分け合うて　一和
征け死ねと父が勵ます祝酒　喜由
祝酒失敗談を興にして　青馬
祝酒まだ子の名前附けでゐず　沒食子
號外の鈴聞いてゐる祝酒　水紫
紋付を少しよごして祝酒　子寒
此の顔の見納めに呑む祝酒　蓮史
祝酒話ばかりがはづむなり　彩古
祝酒ここにも一人酔ふてゐる　長人
祝酒眞一文字の唇へ受け　柳太
祝酒遠慮をすると叱られる　澄風
伸びきつた髭もめでたい祝酒　不角
二本目の酒の封切る誕生日　文糸
部隊みな揃ひ乾盃とはなりぬ　城兒
祝酒眞面目な膝を笑はれる　しづ子
頼もしい男を圍む祝酒　同
祝酒剃刀の傷ある儘に　當千坊
祝酒村は鯨の香に暮れる　同
死んでいゝ覺悟になれる祝酒　南濃路
祝酒内へ這入れば靜かなり　同
行き屆く主を褒める祝酒　登代路
原稿が賣れた二階の祝酒　同
公電へ心靜かな祝酒　双虎
荒つぽい言葉も嬉し祝酒　同
祝酒ニンニク臭い城で飲み　木念仁
燒物の鯛まで躍る祝酒　同
（五）人間の慾は小さい祝酒　村句茂
（五）陣中祝盃大地に突つ立つて　宣介
（五）蠟燭がまたゝく中の祝酒　いわを
（五）出征を祝ふお酒に酔ひきれず　喜山
（五）金盃の文字を讀みつゝ祝酒　茂水
（人）祝酒はがきを出して貰ふなり　かほる
（地）日本の匂ひ溢れた祝酒　五扇子
（天）祝酒これが別れになる酒か　美知夫

兼題　集金　西田　艸樂選

結楔で來る集金は立つたまゝ　聞路
つけられて居ると集金感じたり　いわを
集金へ師走の指がちぢこまり　稔幸
閑つてる家を喚いでる集金人　形水
集金屋百圓紙幣へ惡びれず　啞三味
集金へ日が暮れかゝる堺筋　豆秋
判取帳戻して輕い世辭が出る　としみ
集金のまだ待たされる雨が降り　よし江
集金の世辭聞きながらサテと來る　しづ子
集金人或る日心が恐くなり　柳太
集金へ冷たき火鉢あるばかり　當千坊
集金を百圓紙幣で驚かせ　葉光
集金の我が足音にフトおびえ　ライト
天井を見つめ集金吸ふてゐる　城兒
集金に來て錠前にことわられ　一和
いつも留守集金人へ松の風　鮎美
なんぼでも這る財布で集金人　不角
集金へ道頓堀の灯がともり　かほる
玄關の菊を集金ほめて去に　變人
集金の順番バット買つて來る　五黄子
集金の留守は子供に斷られ　五黄子
（五）商賣はいやと集金から戻り　有町
（五）集金へあやまる姿子に見られ　秀峯
（五）はんぱだけ引いて集金けりをつけ　琴舟
（五）集金の眼に贅澤な台所　小松園
（五）集金のよらぬ話に手をぬくめ　綠雨
（人）集金の嵩が小僧を恐がらせ　沐天
（地）集金の歸り集金人が待ち　五扇子
（天）集金人御苦勞さんの聲もきゝ　澄風

兼題　人情　大石文久選

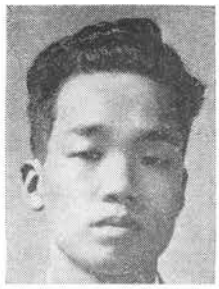
人情は知らぬでもない廻り椅子　登代路
人情の醜くさ人をかきのける　ライト
霜の朝坂の車を押してやり　子寒
さしのべた人情の掌に甘えすぎ　喜由
掌に情に熱い物を受け　長人
人情は實印を押すとこで消え　沐天
人情に甘えて見たり年を病み　黄波
人情へあたら乞食の氣が疲れ　不角
人情を避けて吊皮持ちつゞけ　柳千
人情と規則の中に立つ巡査　蓮史
人情として辯解の婦人記者　水紫
人情は筧の水のそれの如と　青馬
網棚へのつけて臭れた金卸　京二
人情のうどん鼻をすゝる音　卜居

およそよき機嫌となつて雨をほめ
貧にゐて子の素直さを淋しがり

が君の句風である。川柳外の趣味としては柔道、スキー、卓球、庭球、相撲、野球、圍碁等々、その多くはスポーツ畑である。

君は明治二十五年二月二十三日、青森縣黒石町に生れ、（目下青森市在住）小學校教員を振出しに多年東奥日報社會部長として活躍し今は弘前無盡株式會社に主事として青森支店に職奉じてゐる。名譽職としては青森縣體育協會評議員、青森縣教育會代議員、東方會青森縣支部常務執行委員、川柳みちのく吟社主幹、川柳雜誌社各員、川柳人協會名譽會員。

（一八）鳥生古弗君



古弗君は曾て枯佛と號してゐたが路郎門に入つて、師に改號を賴んだところが、人扁を去れよと云はれ、爾來古弗と稱して作句に精進してゐる大正生れの青年作家である。

昭和十年はじめて川柳を作る。

油浮いて港の朝が來る
しんみにと話せば君も苦勞人

君の本名は寅雄、大正二年十二月二日今治市に生れた。職を藝備銀行（廣島市）に奉じてゐる。昭和五年今治市代表として東京に於て御親閲の光榮に浴した經歷の持主である。

川柳雜誌社不朽洞會員。川柳人協會評議員

川・柳・書・架（七〇）

田中五呂八遺句集

氷原社同人編

▼本句集は曾て新興川柳の論客として知られた故田中五呂八氏の遺句集で、木村半女錢、渡邊尺蠖、甲野狂水氏等の序がある。▼卷末には「年譜」「略歷」等が掲げられてある。

▼昭和十三年一月五日發行。四六判函入一〇三頁・定價壹圓・編輯者小樽市綠町一丁目一番地古田盛藏、發行所小樽市花園町西二丁目廿六番地川柳氷原社

人情味立ち入りすぎたのを悔ひる
人情の厚さを鼻の先きに知り
皇軍の情安心してる捕虜
人情へ嬉し涙の夜の壁
ほぐれ來る人情味抱き湯に浸る
雪霏々と温情主義の火が温くし
人情は薄くとなりの蓄音器
人情へ筆を揃へた十二月
憧れの大阪で知る人情味
泣くものかすれて居る身へ泣けて來る
縣知事の眼が濡れて出る露地狹し
薄情だなどと言はせる依賴心
同情をおそろしく見る未亡人
脂肪過多人情にもろひ國訛り
人情を紙にたとへて落目なり
人情に生かされて居る屋台の灯
人情はこんな事にもおせつかひ
損ばかりしてゐる父の人情味
人情に負けて旦那の座りどこ
人情のはしくれ背中叩かれる
さかむけを嚙む人情を知る瞳
前鼻緒思はぬ人の手を貸りる
こせ〳〵として人情を見せてゐる
（五）一笑にふして豊たかな人情味
（五）前掛の下に人情蒲になり
（五）入情の端に觸れたい腑甲斐なさ
（五）人情を知り盡したる烱德利
（五）後悔のない貰ひ子を育てあげ
（人）人情へ自分の膝を見て終い
（地）人情を說く豆炭のほろ温い
（天）人情がなんだと法被熱い息

一和
かほる
文糸
小柳子
宣介
城兒
斗風
青兒
秀峯
よし江
吞水
柳秀
葉光
啞三味
南濃路
方水
柳笑
兎耳
聞路
喜彦
有町
潮花
一和
小松園
村句茂
夜王
蘭華

兼題　嘘　東洋

教會を出た其の足で嘘をつき
あの時の嘘を笑つて夫婦きり
朋かな嘘へ四月の陽がまとも
嘘ついた不安は受話器掛けてから
嘘云て寢かし銃後の針をとり
此の筆で嘘も手馴れた服を着る
臨終の支へはかない嘘をつき
素晴らしい嘘東洋に支那があり
嘘のある世に住む事も面白い
（五）人間に抱かれ過ぎても嘘が出る
（五）人間の嘘はきれいな聲でする
（五）たしなめる母がおろかな嘘を云ひ
（五）新參の手腕きれいな嘘をつき
（五）病人の第六感に嘘がふれ
（五）眞心へ表情がゐる嘘の顔

柳次
由布
當千坊
寄興史
よし江
柳太
葉光
潮花
一狂
雨亭
柳秀
柳笑
美知夫
夢裡

（人）口紅を直して寒い嘘のあと
（地）白い月女街の嘘を憶ひ出し
（天）嘘一つ言へず世間にくたびれる
（軸）嘘のない一刻を子と繪本繰る

席題　裏街　橋本綠雨選

裏街の月へ理性を失はず　東洋鬼
裏街のせまさへ邪魔な車止　一和
裏街へ歸る女給の無表情　美知夫
裏街へ越しそれからの無沙汰がち　喜山
裏街へ來てワンタンが一つ賣れ　水染
裏街にまだ單衣の人もまじつて居　美奈子
裏街の廃箱斜になつたまゝ　紋太
裏街へ來たゲットサン取卷かれ　京二
裏街へ來て幸福な子を見付け　柳笑
裏街でゐて町内の大幹部　萬よし
裏街へ銀杏返しが戻つて來　芳一
午前九時、裏街と言ふ顔を見せ　紅白
裏街へ君と僕とのスクラムで　松太樓
裏街に錢よむ音の灯が洩れる　沐天
裏街にはづかしからぬ子を育て　蘭華
裏街に住んで子役の親になり　同
裏街が張りきつてゐる慰問品　文糸
裏街の三味なつかしい島の内　同
裏街のこんな所でよく儲け　聞路
裏街に噂の女住んでゐる　同
（五）裏街へ來て賣聲よくひゞき　艸樂
（五）秋刀魚燒く煙裏街黄昏れる　木念仁
（五）裏街の師匠の門で別れたり　柳千
（五）裏街へ巡査が走る人だかり　村句茂
（五）裏街で餌りのない人と住み　沒食子

川柳營業家の
カナメ食堂
大阪南區疊屋町
電話南一五五七

（人）裏街に住んで笑ひを忘れかけ　菊人
（地）裏街に藏がつき出て冬の雨　文久
（天）裏街へ夫婦で歸る午前二時　登代路

席題　上陸　小川百雷選

上陸の雨タクシーの列を抜け　喜彦
曉の上陸海のプロフイル　鮎美
靴音は今上陸をしたところ　紋太
上陸に暫しは人の流れなり　長人
爆音の眞下上陸つゞくなり　一和
上陸の一歩日の丸續く街　五黄子
上陸は近しセーラーのボケツ鳴る　宣介
上陸へ日本の煙草吸ひ付ける　村句茂
上陸は一等國の胸を張り　喜由
上陸の棧橋長きなつかしさ　東洋鬼
上陸をした便りからそれつ切り　靜路
上陸へ決意を決めた鐵兜　歌化
上陸の鞄人形を持ちつゞけ　水紫
上陸は先づ日の丸の風になり　不角
銃身の影堂々と上陸す　方水
大股になる上陸の勇ましく　聞路
寢不足のまゝ上陸の歩調とる　破竹
上陸の寂しく風の中に立つ　菊人
上陸へ千人針をしめなほし　白峰
上陸はマグネシュームの中を行く　同
上陸へみんな無口の人になり　秀太

敵前上陸

上陸の用意にかゝる星あかり　同
上陸のこゝも煙の多いとこ　登代路
上陸へ別れた晩の月憶ふ　同
（五）上陸の空なつかしく鳥が飛ぶ　子寒
（五）上陸へうれしく我はけつまづき　雀踊子
（五）上陸へ幸先のよい夢を見る　水紫
（五）上陸の足がみかんの皮をよけ　かほる
（五）上陸へ我が身長を氣兼する　柳千
（人）別嬪見つけたり上陸第一歩　蘭華
（地）上陸のその夜を犬がついてくる　水客
（天）上陸は大地の石をけつて行く　紅白

席題　忘れもの　田中麥魚選

あたふたと來て忘れ物見當らず　五黄子
うどん屋の隅にくすんだ忘れ物　紫香
小商人らしい結んだ忘れ物　一狂
拇印で貰つてかへる忘れ物　友帆
そのまんま車庫へ入いる忘れ物　雀踊子
覺めてからふと思ひ出す忘れ物　鶴城
親切な受付と知る忘れ物　文糸
笑らうて來た用は昨日の忘れ物　聞路
忘れ物又叱られる氣で歸り　蘭華
忘れ物一人が云へば二三人　柳太
忘れ物俺には意地の有る所　潮花
忘れ物母にしつこく尋ねられ　方水
大將と呼びとめられた忘れ物　白峰
忘れ物犬を叱つて見たものゝ　變人
玄關の障子が固い忘れもの　登代路
忘れものの小さな椅子に殘される　春坊
忘れ物大きく膝を叩くなり　ライト
きたなそうに忘れ物片付ける　芳一
置いてある樣に電車の忘れもの　雨亭
立會つて貰つて開ける忘れもの　艸樂
混雜の邪魔にされてる忘れもの　黄波
バスの隅今日の土産を置き忘れ　秀太
突つかけの下駄に呼ばれる忘れもの　柳秀
忘れ物渡す仲居の別な顏　紋太
忘れ物とりに襷をうるさがり　同
（五）忘れ物この頃母に逆がなし　城兒
（五）忘れ物から事づけを思ひ出し　一和
（五）忘れ物見送り人の手から手へ　宜介
（五）忘れ物ぶらり車掌が持つて出る　としみ
（五）株をやる男と知つた忘れもの　菊人
（人）大摩で呼ばれて困る忘れもの　里十九
（地）元通りうまく結べぬ忘れもの　宜介
（天）忘れ物忘れた位置の儘にあり　與三郎
（軸）その時の友達うらむ忘れもの　麥魚

川柳漫畫　累卵の遊び
定價壹圓特價八拾錢送費九錢
發行所　不朽洞
大阪市西成區玉出本通三番
振替　大阪三〇三九二番

席題　人　影　　辻井京二選

人影を啜ひで散らして後つづけ　榮
お寺から親子の影が靜かなり　與三郎
同じ影續く兵士の靴の音　琴舟
ほろ酔ふてみる人影のなつかしさ　文久
後影一つぱいに歸るなり　紅白
人影もまばら夜店の灯はゆれる　長人
銃身は暗夜の影も見逃さず　としみ
くら闇の人影問ふと劍の音　酔狂
人影が淋しき川の音にする　破竹
人影を踏むサーベルの音がさえ　潮花
人影へ忠實らしく仔犬なく　喜彦
二ア人へ逆光線の影のびる　友帆
身投する人影で無し腰を据ゑ　小松園
人影が一つ地球は午前二時　漫歩
人影を追へば落葉にとがめられ　菊人
悲しみを知る人影がをれてゐる　水客
人影をふむ失業の靴の音　愁水
人影は默つて逃げたまゝに風　彩古
人影へ口をつくんだ事務机　柳太
人影を碎き緋鯉は盛り上り　木念仁
人影に又だまされた戀する身　艸樂
(五)人影は曲者だとか秘書だとか　萬よし
(五)人影が一緒に動く春の水　艸成
(五)ポスターを吊る人影と師走風　水紫
(五)人影がちらり掛取らしく來る　艸樂
(五)質屋から出る人影が振りむかず　與三郎
(人)軒下に居るゐかけ屋の影が暮れ　東洋鬼
(地)身を墮す驛に人影さへとだえ　城兒
(天)掌のものがこぼれる人の影　白峰

席題　見送り　杉原大研子選

見送りのまだ商談が殘つてる　水染
見送った人いつまでも濡れてゐる　斗風
見送りの旗へ最後の誓する　五黄子
見送つてその五分刈を眼に殘し　艸樂
見送りの中に辯ある父の朝　喜由
貸金を忘れて送る列に入り　水紫
見送りの一人は旗の蔭に立ち　柳次
秋の月見送つて出た客と賞め　沒食子
一泊の縁見送りの前へ出る　喜彦
見送りに思はぬ人の顔を見る　哲也
失敬をさせて子供に見送らせ　紫香
見送りの母が小さくなつて消え　鮎美
萬歳へ西洋人も旗を擧げ　としみ
汽車の窓青龍刀を賴まれる　同
(五)見送りに來て友情に泣かされる　愁水
(五)見送りへ笑つてみせるたのもしさ　文糸
(五)見送りの父の面影つきまとひ　子寒
(五)見送りへうなづくだけの母になり　秀太
(五)見送った後は淋しい村の驛　春浦
(人)心配はテープが早く切れたこと　小松園
(地)見送りの中に默つて妻もゐる　金愚
(天)泣かないと云ふ約束で見送つて　變人

安産のためにワダカルシユーム錠

なぜ……
……母体は……
疲弊するか？

胎兒の劇しいカルシユーム要求と食物よりのカルシユーム攝取不足は必然的に母体を疲弊に陷らしめ、姙娠中多發する母子体の諸種の疾病は實にかゝる所に重大原因をもつてゐる事は醫學界に認むる所である。
大阪帝大教授片瀨淡博士は多年之が研究に沒頭され、母体のカルシユーム攝取によつて姙娠分娩が安全に經過し、且授乳期に偶發する母子体の疾病を豫防し乳質を可良ならしむる事を實驗されたがわがワダカルシユームこそは諸姙婦に必要不可缺の常備藥でなければならぬ

樹林醫學博士 推奬
片瀨醫學博士 監査

姙娠の方へ急告
新案特許 安産メーター進呈
正しい分娩日が一目で判る安産メーター及び大阪帝國大學教授醫學博士片瀨淡氏遺安産のためにの册子ハガキにて申越次第無代進呈

發賣元
大阪道修町 和田卯助商店

喫茶
アジア
難波

春興な、草

東魚塵

横斷

心齋橋筋のゴーストップ、恐ろしく手間が掛つて埒があかず、どうした事と人垣を押分け、覗いて見ると、只今膝行が横斷中。

献金

婦人、新聞社へつゝましく現はれ、『實は、手前共では、先頃まで、新聞を二種取つて居りましたが、此の際一種に致しましたので、其節約致したゞけを、せめて皇軍の御慰問に持參致しました』と云ふ。社員、『これは御奇特――』といたゞいたものゝ、あはてゝ、『してその、御止めになりました新聞は何で――

英語

教師、生徒に向つて、自分の耳を押さへ、『これは?』『イヤア』目に指して、『これは――』、『アイ』――と段々行つて顎をさす、生徒、ハツとして中々答へが出ぬ。教師せき込んで『コレハ〳〵』と顎を突く、生徒、あわてゝ、『アツパーカツト、』

昇降機

田舍から來たばかりの男、ビルへ這入つて、エレベーターの前へ立ち、標示器を見上げてビツクリ、『アツ、何んと早く廻はる時計か――

一路集

募集句

前田五健選

日の出

日の出など他所に長屋の夜が明ける　寄與史
戰地から日の出故國を懷しみ　松太樓
日の出〳〵子供を叱るのは止さう　曉童
初日の出今正月の顏にする　同
老人に只ありがたい日の出なり　葉光
日本の晴衣〳〵へ初日の出　曉明
商賣が日の出拜めぬものにする　春巢
初日の出宿のドテラが寒すぎる　美知夫
病人の日の出へ向けた眼は嬉し　南濃路
呼びかけるように日の出は伸びてくる　沐天
二ア人の日の出へあをき松の風　鮎美
出世して歸り日の出を拜む朝　同
朝霧が日の出に解ける高架線　無煙
日の出へと霜のあしたのすが〳〵し　新水
日の出から人間界は慾と化し　五扇子
船旅の日の出を水平線に見る　同
朝詣で日の出になつて戻つて來　風葉
虚僞も紛飾もなく日の出の雄大さ　同
日本人だけに拜める初日の出　謙南坊
ケーブルの窓から日の出伏し拜み　斗風
凡人の何も思はず日の出見る　同
二碗目の雜煮日の出の窓となり　潮花
元旦の日の出へ向ひて母とねる　同
山牛分日の出へクツキリ浮いてゐる　美津枝
海へきて日の出の汽車となる旅路　水客
洗面器働く色で太陽でる　同
初日の出齒磨の粉が眞白し　同

精鋭吟

日の出〳〵サツサと仕事場へ急ぐ　曉童
裕福の壁全面に日の出うけ　文庫
煙突は高く日の出へ黑煙　鮎美
山で見る日の出神話を信じさせ　美知夫
ありふれた願ひ日の出へ手を合せ　文庫
自動車の徐行へ日の出美くしい　斗風

感吟

鷄のとさかまともに日の出する　水客

パイプ

重役のパイプ平和なビルの中　春坊
パイプくわえて小鳥の機嫌いゝ日なり　水客
粉黛をつめて上陸するパイプ　葉光
きれいな灯パイプくわえてゐたりけり　鮎美
パイプふと旅裝の臍へすべり落ち　潮花
紙パイプ戀人の手に燃やされる　南濃路
おもむろにパイプを置いて印を捺し　文庫
待たされるパイプはやけに音を立て　美津枝
パイプ思へば俺も此所に二十年　沐天
つらい別れのパイプの煙　新水
落されたパイプ屋形の福の神　同
(人)初對面パイプの君の鼻たかく　鮎美
(地)噛みぐせが淋しパイプにある疲れ　水客
(天)惡評を他所にパイプを掃除する　斗風
(拙吟)廻椅子パイプの艶を樂しめり　同

市場 沒食子 選

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳人の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催

▼川柳雜誌社名古屋支部新年句會は一月五日午後三時から長圓寺で開かれた。路郎主幹出席の豫定であつたが急病で餘儀なく不參、大阪からは西田艸樂君が出席され盛會だつた。

▼一月三日夕、川、雜事務所で偶會

▼川柳雜誌岡町支部創立句會は一月拾五日午後五時半から市電高垣町停留所前北野衛生組合樓上で盛大に開催された。

▼有恒川柳會は一月十一日午後六時半から有恒倶樂部に於て例會開催。

▼昭和川柳社新春句會は一月六日夜おぐらやビル四階で開催された。川雜から路郎、形水、亞鈍の諸君が出席した。

▼松坂倶樂部の路郎川柳講座は一月十六日午後一時から開講された。

▼一月十六日午後六時から尼ヶ崎市阪神電車停留所南衛生組合事務所で小林文月君主催の川柳會が催され路郎主幹出席。

▼坂井久良伎翁古稀記念書畫頒布會は十二月十一日神樂坂の末よしで開催された。

▼靜岡川柳會では昭和十二年十二月十二日十二を送る會を開かれた。會費十二仙、十二等迄星賞といふ面白い趣向である。因みに秋水君(靜岡)が「靜岡川柳」に十二盡しを執筆されてゐる。

▼川柳國十二月句會は同日十日夕刻より高垣町北野衛生組合事務所で開かれた。

寶飾品・記念品
錦
大阪市南區櫻谷西之町二五
電話南一二五八

消息

飜譯

洋食を喰ひに行き、フォークを訛つてホコ、ホコと云ふ。連れの男、たしなめて、それは、フォークですよと云ふと、何さ、譯せばホコ、何れも肉を刺すわ、さ

ヒステリー

評判のヒステリー、夫婦喧嘩の絶え間がないので、あれも困つた者と近所中、寄ると觸はるとの噂の中に、一人、誠に結構な御夫婦中とほめる——誰だと見ると、これが、燒つぎ屋。

仁王

うちの親爺は仁王樣のやうですと云ふそれは〳〵、體育奬勵の今日賴もしい限り、シテ丈イは、目方は、と聞くと、イヤ何、勤めが門衞。

柳誌『川柳人』の發禁に際して

石田沐天

舊臘、京都の柳誌『川柳人』の發禁の記事を見その後既刊に遡つて同樣の處分を受けたるを聞く、理由は皇軍將兵の士氣に支障を來すが如き重大事であると傳へらるゝにおいて愕然たるものがあつた。

茲に吾々川柳子として川柳史の一頁に汚点を遺したる不德漢に對し一言なかる可からざる所以である。

既往の『川柳人』誌は其の傾向に於いて屢々吾々の心膽を寒からしめてゐた柳誌であつた。筆者は茲數年來同誌を手にせざるも既に當時の傾向を以つてして無謀なるイデオロギー詩であることを、自ら一回の投稿(火箭集)に據つて體得して居つたものである。當時筆者は檢閲網の不

▼水谷鮎美君(兵庫縣)は一月五日令息同伴伊勢大神宮に參拜された。「神前の風わが呼吸の瞳にしみる」の書を寄せられた。

▼西脇提象君(神戸)から「凱戰利吟」と題し俳句十數句印刷の葉書を頂く

▼烏生古弗君(廣島)は正月鄕里今治に歸られ石崎柳石君と久々で快談された由。

▼江戸みつる君(大阪)は温田中温泉から上林温泉、志賀温泉ホテル熊の湯と旅行をされ山田温泉から「遭難の話ガイドにおどかされ」ラツセルにスキーヤーもめる小屋の朝」のお便りを頂く。

▼宮内耕期君(台中)は年賀狀の端に元旦の温度最高二十度最低十五度と放送されてゐた。羨ましいあたたかさである。

▼宮尾しげを君(東京)は温澤へスキーに行かれ、「川柳と同じくやらぬとうまくなれぬ」とは歸京されてからのお便り。書簡紙の裏面は千本櫻靜御前の舞台面封筒表には忠信いづれもしげを畫くにて紙質もまことに凝つたものである。折柄居合せてゐた川柳雜誌社々員、漫畫宣傳社々員漫話術研究會の面々が奪ひ合つて鑑賞した。

▼植山九天君(廣島)は鄕里へ歸られ奇景絶勝耶馬溪は呼ぶと記された名所圖繪を寄せられた。

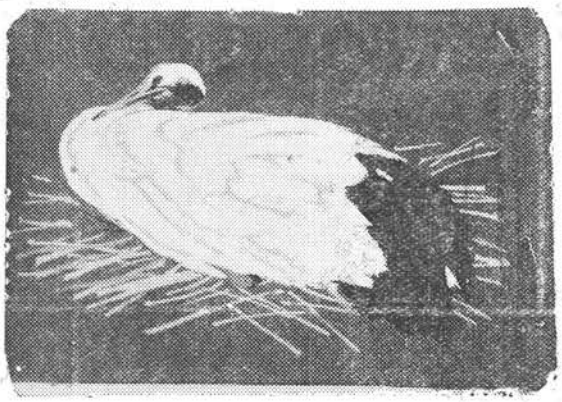
▼今治支部から一月四日寄せがきが届いた。

▼太阪鐵足會新年句會のよせがきが一月四日岡町支部丸尾潮花君から送られた。

▼川柳研究社から新年會のよせがきが頂く。

▼櫻川不水君(下關)から「信念の前に敵なし」と鞭撻のお便りに接し編輯部員一同更に奮起して止まなかつた。多謝。

▼石田沐天君(大阪)は川柳人協會宛に寺井洋家具部時報を送られた。時報最後の頁の柳壇にはつとめて新人にわかり易い句を川柳人協會員として發表してゐられる。



—適最として品祝御婚結—

始めて出版された人生記錄帖

わが家の記錄

結婚を礎石とし、家庭生活を柱として築かれゆく人生の記錄を、寫眞や記事により巨細に綴りゆき家の歴史を完成するための貴重な記錄帖です。

四六四倍判横綴(堅約九寸、横約一尺三寸)百二頁
表紙裝釘—川端龍子先生筆　龍村製織所別織
各頁に樋口富麻呂先生の美麗な飾畫入

(桐箱入)　定價　十八圓

大阪
高麗橋

三越

四階　圖書部

備を喞つてゐたものであつたが、其れは『川柳人』誌のみで無く、他の文藝上に互つても然うであつたから當時は其れ等のレベルに追縱ーてゐたものであらうが、偶々今次の如き時局に直面して皇軍將兵の士氣に支障を來すが如きイデオロギー詩の掲載にいたつては、柳界の中央公論だ、ヤレ日本一だとか稱して悅に入つたり或は憐れな入墨などをチョロつかせて同好者に厭がらせを言ひ歩く此等無邪氣な連中とは譯け合ひを異にす。であるから今回の同誌に對する當局の處置は當然すぎる當然であつた。

彼れ『川柳人』誌は身から出た錆は己れのみでなく全國の川柳愛好家の神經を尖らせた點を以つてしても、將應召銃後の川柳子に對して謝す可きであると斷じて憚らぬのである。

一面から眺ればイデオロギーを玩具にしてゐた幼才なものであらうが、玩具の種類に依り此の大局を認識せず川柳子の

戰地より

月原宵明

南京占領

歴史的進軍中に僕もゐる
逆襲に冠り馴れたる鐵かぶと
日本酒の味を慕ふも勝いくさ
銃劍の先に星あり故國想ふ
入城は蔣の椅子へも坐つとき

陣中川柳

クリスマスツリーも出來た假營舍
煙草半本追擊の一休み
財政部我らの酒保となりにけり
南京でマンヂ巴がなつかしむ
加納砲行手は支那の心臟部
南京占領朝日はつきり東から
車座で慰問袋のひもが解く
戰友の遺骨をしかと入城し
消燈ラツパ尾を曳いて敵の首都

漫畫で出來る事なら何でも
大阪西區土佐堀江通
電話 3333
漫畫宣傳社

保險に慈愛なさるしな

可愛い御子樣方の爲に
生命保險に御加入下さい
それは親御樣方の尊い愛
の發露でございます。

大きくて確かな
日本生命
本店・大阪今橋

▼橋本綠雨君(大阪)は十二月十二日官幣大社日前神、國懸神社、竈山神社、宮幣中社伊太邪曾神貴志瀞へ參拜された。同十六日に官幣大社大島神社仁德御陵へ參拜された。

▼伊志田孝三郎君(名古屋)は故映絲君に代つて新愛知新聞の柳壇を擔當されることとなつた。發展を祈る。

▼正本水客君(大阪)は十二月廿五日令弟と二人で小雪の中を阿蘇山へのぼられた。

▼和田天民子君(東京)は昨年末から滿洲へ向け旅立たれた。

▼三條東洋鬼君(神戸)は毎月一回は用件で鳴尾へ行かれ、十何年前の川柳雜誌社の所在地であつた遲日莊の前を通られるさうであるが鳴尾の大火以後同君の借家全燒の災厄に遭はれてからは出向かれぬ樣子である。お化けが出ると云ふ噂があつた遲日莊の庭の大柳は今はもうないかも知れぬ。

▼小林不浪人君(青森)から青森みちのく吟社新春句會のよせがきを頂いた。

▼蛭子省二君(朝鮮)は昨年末から御加減惡るく新春を病床でむかへられた。

▼弘津慶一君(朝鮮)は一月十一日事務所へ來訪され路郎主幹と歡談同夜歸鮮された。

慶弔

▼坂井久良伎翁は目出度く古稀を迎へらる。柳界のためにお慶び申し上げる。

▼田中風葉君(大阪)は正月元旦次男を儲けられた。

▼正本水客君(大阪)は一月六日長男を儲けられ佳弘と命名された。

▼水谷鮎美君(兵庫縣)は一月元旦午前〇時十分目出度く次男竹善君を擧げられた。慶賀に堪えない。

▼松枝靜波君(兵庫)は奮蹟十二月十日四男幸男君を儲けられた。お慶び申上げる。

▼岡本映絲君(名古屋)は十一月廿九日永眠された。君は名古屋柳壇の重鎭であつた。享年四十九歲。謹んで悼む。

轉居

▼吉田水車君は名古屋市千種區田代町堀割七八へ

▼松本文太君は金澤歩兵七聯隊第六中隊へ

▼田邊由布君は兵庫縣武庫郡精道村打出字宮塚一五へ

▼和田均君(和田醫院)は東成區深江中六丁目三十八番地へ

▼大森千代香君は福山市延廣町大村ヒサ子方へ

金科玉條『冷靜』を拋擲して敢てものせるイデオロギー詩であるならば斷じて其の責を負はなければならぬ。茲において銃後の全川柳子は彼等一味に對し强烈なる爆擊を加へなければならない義務を有するものであつた。

柳句中興の祖師の一人井上劍花坊に對し、師父に弓射く者或は死者に笞打つ徒輩との誹謗を享けようと雖も斷呼此の大局上に起つて川柳子の一人として彼等非國民的人種に對し徹底的の爆碎を加へる者であることを泪をふるつて明記して擱く。二五九八、一、一〇

川雜・案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行半すゞと金十錢（但し前金切手代用可）句會案内、欄、移轉、その他柳會廣告

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は桝形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利なので特におすゝめいたします送料は本社で負擔いたします

八十枚綴一冊 金十五錢
同 二冊 金廿五錢

御申込は川柳雜誌社へ切手代用も可

川柳の世界的進出實現に懸命の研究誌—一部廿錢送料三錢

S・H・K

東京市小石川區初音町四
川柳飜譯研究會

川柳を作る人愛好する人の必讀誌毎月一日發行一部廿錢送料一錢

川柳倶樂部

東京牛込區揚場町八川柳倶樂部社

東海の代表誌

川柳草薙

一部一〇錢一年一圓（郵稅共）
名古屋市南區八熊町
寺田一一五〇
發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

京
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 川柳 みちのく
一部十五錢一年一圓五十錢
青森縣黑石町 川柳みちのく社

改號

▼野口秋生君は柳太に改む
▼岩橋最美地君は双虎と改號

正誤

▼前號二十三頁發表句「支店」の上段三行目「内達」にの句主同は市他樓

★社告

川柳雜誌社名古屋支部は名古屋市千種區田代町堀割七八へ移轉した。

大坂形水君を川柳雜誌社不朽洞會員に推薦した。

川・協

▼舊冬、東都の川柳界に發禁の不祥事が勃發した内容は反戰思想の句に對する取締りで、國策としてあまりに當然のことで何人もその非國民的態度に惑はされるものはゐなかつた。從て累を他に及ぼすほど柳界全般が腐つてはゐないが、それにしても川柳人が、他の人々以上に時局を認識することの誇りを持ちたいものだ。

▼この點から考へても川柳人協會への入會は心あるもの〻第一要件となつた。協會員は互に警め合つて、思想の健全はもとより、川柳詩への正統なる歩みを獲得しなければならないと思ふ。

▼本協會の全國役員を新春に際して一齊に發表したいと思つてゐたが多忙に次ぐに多忙でそこまで事の至らなかつた事をお詫びする。

ちゑのとんかつ店 湖月
東地法善寺境内

川協會員を募る

川柳人協會も皆様の御後援により發展のよろこびを以つて新春を迎へました、此の好機を逸せず、どなた様もこぞつて御入會下さらむ事をお願ひいたします。

川柳人協會

胃酸過多症
胃痛、惡醉
二日醉、溜飲
酒・煙草の のみすぎ

制酸・鎭痛・劑
ノルモザン錠

ノルモザン錠は、珪酸アルミニウム（醫家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎭痛の効果を併有する學理的製劑です。

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺戟を去り、胃酸の過剩分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎭め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミヅ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます。

【價格】 一日分（三錢） 三日分（五〇錢） 約一週間分（一圓）
十六日分（二圓） 一ケ月分（三圓五〇） 二ケ月分（五圓）
各地藥店にあり

發賣元 大阪市道修町 株式會社 武田長兵衛商店

37—117.00

各地柳壇

いのちある句を創れ

雜川 廣島支部句會（廣島）

福田山雨樓氏を迎へて　十一月二十二日　於廣鐵倶樂部　澤井香月報

出張、注射、湧く、傳票、ニュース　葉留路
平常の無沙汰出張先で詫び　古弗
出張の話餘分なことにふれ　一雄
出張で妻の操縦聞いて來る　寧男
出先では下戸も一本つけさせる　九天
方言をおぼへ出張面白し　至宏
出張の宿屋で友の不運聞き　葉留路
出張に慣れ定宿で輕い酒落　星州
日記帳出張の日は無地が出來　久米雄
出張の地酒に醉ふた妻揚子　同
出張の足色街を拔けて來る　ひさし
出張のどてらで流す年の市　天八
出張の留守は子供の膳となり　寧男
惡友が來たで出先のことが暴れ　ひさし
出張へ歡呼がつきい街の角　香月
出張へとても冷たい雨が降り　草雲子
出張に寢付きの惡い酒となり　久米雄
注射針平氣な醫師の顏が見え　香月
注射針とつさに元の顏になり　山雨樓
注射して看護婦の手美しい　紫涙
食鹽の注射へまるく立つ瞳　天八
注射にも馴れ病院に生きており　香月
神經へつめたく觸れる注射針　久米雄
注射針女のあざを見つけたり　山雨樓
看護婦の初毛に注射ほつとする　葉留路
靜けさを破る注射よ奇蹟あれ　ひさし
女房の食慾がない注射デー　寧男
十一時着くでカンフル二本打ち　至宏
湧き出づる思案に一人ほくそ笑み　久米雄
湧き上る歡呼故國は日本晴れ　天八
萬歲の湧く城高く日章旗　葉留路
感興の湧くまゝ輕く走るペン　山雨樓
夏雲は名もなき山の上に湧き　香月
幸福を祈ると輕い嫉妬湧き　同
傳票で今日のおかずも買つてくる　康津奈
傳票と顏とを女給見くらべる　古弗
傳票へ二本の指の走る音　香月
サラリーの傳票主義に世を渡り　天八
傳票を渡して歸る夜が冷える　山雨樓
傳票と算盤兩手仲が好し　天八
傳票をもつて割前とりに來る　葉留路
勘定は俺かと傳票書いてゐる　古弗
傳票へ課長氣安く判を押し　至宏
我が父をニュース映畫で見つけたり　三郎
鈴を手に號外屋人に突き當り　五厘棒
ハネを待つニュースに雨をつめたがり　古弗
特種をつかんだ記者の忙しさ　紫涙
快ニュースかぶつて見度い鐵かぶと　古弗
ちよつとしたニュース刑事の目が光り　山雨樓
眼鏡越しニュースへ涙ぐんでゐる　鶴三
氣の利いた給仕ニュースを聞いて來る　久米雄
賴りない男がニュース聞いて來る　葉留路
午後七時ラヂオへ一家まるく寄り　九天
スヰッチを入れるニュースは勝戰　星州
五分前主人ニュースを入れに立ち　五厘棒
晩酌に隣のニュースよく聞こへ　柳人

雜川 松江支部句會（松江）

十一月二十二日　於勝谷山川兒居　勝谷山川兒報

洗面器、提灯行列、人絹、神有月、東海道
寢過して慌て申した洗面器　夢迷
健康の朝靄に出す洗面器　柳人
洗面器けつて受取る號外紙　一湖
洗面器へ秋が落てゐる　庄介
寄宿舍に光るものあり洗面器　柳人
提灯行列銃後の聲が合つてゐる　三雷波
提灯行列中の一人はうつむいて　笑鬼
提灯行列兒は戰地へ行つてゐる　三雷波
背の子もふんばつて提灯行列　登美也
灯の海の下界や日獨伊協定　梟人
提灯行列豆靴が出てゐます　山川兒
戰地へ響けと提灯さし上げる　三雷波
人絹の羽織氣にしたすわり方　一湖
麗人が着れば人絹らしくなし　三雷波
人絹に似た冷たい人となつて別れ話など　梟人
人絹ひら〳〵風は秋です　柳人
秋の肌にふれる着物は人絹でお前は娼婦　夢迷
神有月北支の寒さ偲ぶなり　笑鬼
日支事變第三期戰に入る
雲崩れ神有月の空驚ぐ　夢迷
神在月戰地の兒を思ふなり　登美也
出來心神在月に恥しい　同
號外へ神有月の大歡呼　柳人
金柑へ神有月の平和あり　山川兒
神有月不運つゞきを祈りたい　登美也
戰捷へ神有月の人の足　柳人
酒飲んで行く東海道は日本晴　夢迷
鳥追の三味に時雨るゝ東海道　梟人
東海道旦那は脫けて朝になり　同
東海道名殘りを語る峠松　同
東海道富士はつきりと汽車の窓　柳人
やたら涙も乾てくる東海道　一湖
東海道又來てゐるロケーション　笑鬼

雜川 今治支部句會（今治）

十二月二十五日　於長野文庫宅　渡邊曉童報

爪彈き、濕布、目藥、鰯
爪彈きは我を忘れた姿なり　文庫
爪彈きの酒とも言はず靜かなり　曉童
爪彈きへ小道具月を出し始め　同
爪彈きのじつと押へてゐる心　同
爪彈きを旦那どうにか彈けるなり　心府
本伏せた儘で濕布の顏淋し　文庫
湯の沸る音へ濕布の輕い咳　心府
濕布した回數劣もあわれなり　曉童
濕布した横に母親チト痩れ　文庫
濕布して陽だまりを追ふ瞳がつかれ　曉童
濕布してゐて男氣の飲む氣なり　同
童謠へ目を開いてゐる濕布の子　心府
濕布の子人形さんか物憂く見　同
濕布して明日を急ぐ子の晴着　曉童
涙花節前座は喉を卷いてゐる　同
バケツ提げて手傳ひに行く鰯網　同
鰯屋のあつさりまけて黃昏れる　文庫
鰯屋が取卷かれてる午後の路次　曉童
鰯燒いて又賴母子を取り損れ　心府
目藥に遠くの音をきいてゐる　同
目藥へ看護婦さんはたゞ白し　曉童
目藥へ秋もやうやく逝かんとす　同
目藥へしづかな夜となりにけり　きよし
目藥の看板太い目玉のみ　同

雜川 鶴町支部句會（大阪）

十二月十五日　於加藤ライト居　加藤ライト報

既製品、巡拜、國旗、安全地帶、豆炭、名刺、やりくり
綻びにすぐに見てとる既製品　松太樓
既製品少しは辛抱するつもり　ライト
既製品値と相談で買ふて來る　松太樓
大晦日レデーメードに人だかり　一郎
新調は既製品だと逃げ廻り　京詩
既製品には見えませんよとひやかされ　一郎
既製品でもと丁稚は思ふなり　變人
既製品でもと丁稚は思ふなり　同
既製品でもと丁稚は思ふなり　ライト
既製品で間に合ふ身體羨やまれ　一郎
やあ君も既製品かと笑ひ合ひ　謙公
既製品賣れて人形脫がされる　巨人
氣に入つた柄は短かい既製品　ライト
ボタンの位置を替へてるレデーメード　夕鐘
巡拜券買ふて家族の紀元節　一郎
巡拜へ去年と同じコースで來　松太樓
巡拜の引きする足となつてゐる　よしみ
巡拜の歸りを街の灯がまねき　小柳子
巡拜に黃いろい袋提げて出る　夕鐘
巡拜へ汽車と電車の疲れが出　松太樓
巡拜の後先になり連れになり　ライト
巡拜の紅一點は人氣者　巨人
巡拜の一人露營の唄となり　白峯
朝霧を突く巡拜の勝戰　夕鐘
巡拜の丈夫になつて來た身體　よしみ
巡拜へ慾はサラ〳〵なかりけり　松太樓
長男を死なせ巡拜思ひ立ち　變人
陷落を祝ふ國旗の列に入り　ライト
軍用車旗一杯へすべりこみ　變人
日の丸がピルにひらめくよい日和　同
學童に國旗出す日を敎へられ　ライト
回タクは安全地帶へ泥をかけ　よしみ

子を抱いて安全地帶寒いこと　變人
安全地帶馬の歩みを見てゐたり　同
母が居て安全地帶乘り後れ　松太樓
終發へ安全地帶の灯も淋し　京詩
自動車を安全地帶から覗き　謙公
豆炭が一つ恪氣の夜が更ける　變人
豆炭が貧弱すぎる客が來る　夕鐘
戰勝のニュース豆炭眞赤なり　小柳子
拍手木へまだ豆炭は消えぬなり　よしみ
豆炭の殘り集めて夜店更け　謙公
豆炭の匂が殘る今朝の膳　白峯
豆炭も消えて試驗の夜が更ける　謙公
廣告の名刺となりし年賀狀　松太樓
この人ももう死んだのか古名刺　一郎
紹介の名刺體よく斷はられ　よしみ
初對面名刺へ固うなつてゐる　夕鐘
嘘を言ふ名刺と知らずもてなして　變人
保險屋の名刺奥まで通されず　京詩
肩書の立派な名刺だけ殘し　一郎
花名刺あつさり妓くれるなり　ライト
又名刺かと人事係長　よしみ
花名刺つく〳〵見てる二日醉　夕鐘
花名刺財布の底に古びてゐ　松太樓
玄關子顔と名刺をくらべてゐ　謙公
やりくりは親ゆずりだと笑はせる　京詩
やりくりは時計の音に腹が立ち　粒子
やりくりに疲れ切つたる顔の皺　松太樓
臍くりを出してしもうた年の暮　夕鐘
やりくりもどうやらついた大晦日　一郎
やりくりを知らず子供は駄々をこね　よしみ
やりくりは出來ず火鉢の灰を見る　變人
やりくりの金を妓におごらされ　ライト
やりくりへ子供のものは放すまい　同

雜川　**梅田支部句會**（大阪）

師走二十七日　於コロンバン喫茶寮　酒井斗風報

赤ちやん
赤ちやんとひなたぼつこの日曜日　斗風
赤ちやんの宛名で屆く祝物　同
ストーブは温し赤ちやん抱きあげる　鮎美
クリスマスツリーへ赤ちやんひつかかり　同

十二月二十日　於仙波夕人居

藝者、十二月、かき餅
金力か意地か藝者の長きせる　秀峯
うれつ妓の蛇の目へ雨のきついこと　卜居
梅咲いて藝者の願の鈴が鳴り　鮎美
鞍替ときめた藝者の十二月　遊歩
ニュース見に來てゐる藝者素顔なり　鮎美
温布した藝者と歩く新開地　斗風
寒月や藝者罵しる如く去ぬ　鮎美
そろばんを置いて思案の十二月　秀峯
金談がきれいにすんだ十二月　斗風
母連れて出て温たかい十二月　鮎美
用事だけ云つて歸つた十二月　秀峯
福引の灯が並んでる十二月　鮎美
賣出しと日の丸街は十二月　斗風
丹前で儲けた旅の十二月　鮎美
十二月舊師を訪へば病み給ふ　同
買物に疲れてかへる十二月　遊歩
かき餅がおいしい夜の女客　鮎美
かき餅を妻に燒かして雜誌よむ　斗風
夜學から歸りかき餅燒いて食べ　鮎美
かき餅を燒いて分家の嫁もゐる　秀峯
かき餅を燒く母親の背がまるし　鮎美
か餅を燒いてニュースへ父とゐる　卜居

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報　路郎選

うどん、號外、雜吟、ニュース館にて、
牛どんと油障子の字は太し　一路
妻の客小田卷などを喰べて去に　生
午後六時うどんの腹がへつて來た　同
鼻風邪のうどん寢床に運ばれる　春巢
どう見てもうどんですます柄でなし　香附子
圍遊會たゞのうどんは水臭し　方正
春近しうどんの許りる病上り　同
ノーマネーうどんの味がよくわかり　千秋
眼鏡ふき〳〵うどんの夜は更け　眞三
うどんやでつゝましく喰ふ母娘連れ　柳秀
うどんやの娘の役は松魚かき　同
醉つたのもふるへてるのもゐる夜鳴　利生
勅任もおひるにうどん召し上り　同
晝を問ひ〳〵しつぽく取りに走らせる　青一路
退院も近しうどんも許されて　たけを
景氣よくかけ一丁も通される　同
外勤の今日もうどんの晝となり　栗
うどん喰ふ箸にも似たり脚線美　方正
內職はのびたうどんへ向き直り　柳秀
すうどんでぬくもつたとは淋しいぞ　路生
號外を部隊の名から聞きかへし　眞三
號外への寫眞に誰か探せそう　同
連勝の號外塀に張りまはし　同
號外は給仕はいつち先に讀み　利生
號外はあはてたやうに刷つてあり　同
戰勝の號外後塲はピンとはね　同
號外を横目に王手飛車と來る　芳一
號外を萬歳今日の種にする　同
號外に眼鏡をかへて地圖を見る　春巢
號外の路次へ入つた音となり　栗
ステッキの先で號外よまれてゐ　同
電送の寫眞だけなる號外か　方正
號外の人事は時の人なれや　同
不再錄の電送寫眞かすれてゐ　同
號外は臨時ニュースで聞いたとこ　君女
號外屋小雨の中を突走り　同
號外へ銃後の顔と顔と顔　柳秀
號外をのぞきに一言居士は立ち　栗
日本の勝利バスへも投げ込まれ　たけを
號外へ箸持つたまゝ首を寄せ　芳一

路郎選

反省もなくしやべる唇みつめてゐ　君女
千人針惡意でなうて急ぐなり　同
足を組む女と終電車で並び　春巢
奇拔な名つけて喫茶店はやり　同
內職と見えぬ市電の毛絲針　同
乘換へてからの新聞立つて讀み　同
諧謔が恩師へも飛ぶ祝賀會　千秋
ポストマンからたちの薩に入りにけり　栗
せかされて懷爐の灰をかへる母　同
占領の場面へ拍手送るなり　利生
スツポンの如く默して機をねらい　路生
どうでもしろと馬倒れてゐ　同
利用するほんの僅は威張らそう　方正
取りこみのこんな身裝を女詫び　柳秀
居留地の月影をゆくハイヒール　同
男性には用がありません特價品　たけを
父兄會ちめたい椅子にかけさゝれ　利生

雜川　**畔柳社句會**（大阪）

十一月四日　於大鐵局クラブ　正本水客報

紅葉、ニュース、祭日、覗く
この上に寺あり紅葉散つて來る　某人
清流に近く紅葉の座がきまり　喜山
クレヨンの赤が足りない紅葉谷　某人
手の届く所の紅葉むしろしく　柳太
飛石へ江葉一枚踏まれてゐ　紫香
自轉車で聞きながらくるいゝニュース　水客
持ちよつたニュースへ地圖は擴げられ　紫香
出勤へニュース半分ほど殘し　喜山
みんなもう知つてる通り辭令出る　某人
老夫婦ニュース映畫を拜んでる　萬的
現場見たニュースが小さい夜の膳　某人
祭日の夜汽車で歸るプランとし　紫香
非常時の祭日戰闘帽の列　一生
祭日に赤子の群れが續く宮　知聞
スリが居そうに祭日の人の群　喜山
祭日のプランへ天氣崩れそう　同
非常時の祭日遊びになど行けず　柳太
ラヂオ體操祭日の陽はあかい　紫香
祭日をひとり歩けば土埃り　水客
祭日の雨道頓堀のハネとなり　一生
祭日日章旗はいゝなと思ひ　某人
關東煮屋覗いて眼鏡くもらされ　一生
叩き賣り覗いた顔へ安く貰け　知聞
寒々と廣間を覗くひとり旅　水客
あばら家の暮らし覗いたなとひがみ　某人
背伸して覗くほどでもない喧嘩　苦樂公
釣れぬ日の魚籠を覗いて叱られる　某人
背伸してやつと覗けは乞食の子　喜山
覗かれてゐると知つてるコンパクト　水客
覗かれてゐそう見合のお茶の味　喜山

雜川　**岡町支部句會**（豊中）

一月四日　於黑川紫香居　丸尾潮花報

地下鐵、追羽根、凧、責任、
新春街頭風景、虎、お可笑
地下鐵の利久の音に振り返り　みかさ
地下鐵へ來て大阪の夜は靜か　美津枝
地下鐵を出て降り出した雪を行き　風葉
地下鐵で逢ふて其の儘流れ込み　紫香
此の上が道頓堀と敎へられ　稔華
地下鐵を出て阪急に君と居る　潮花
地下鐵で降りてまだ陽の有を知り　卓舟
地下鐵へ來て靴の雪がとけ　染史
地下鐵を出た鼻先へビラを吳れ　水客
追羽根を輕くはづれた日本の娘　草水
追羽根の娘が取り卷いた紙芝居　秋子
追羽根が屋根にかゝつてやめにする　華蝶
追羽根の我が子我が子へ母嬉し　水客
追羽根のはづれて釉へ笑ふたり　紫香
追羽根をはづれて春の禮を受け　春坊
追羽根の娘らしさを振り返り　美津枝
追羽根の娘へ初春の陽がまとも　潮花
凧三つ並んで山は日本晴　雀草
宣傳にテンプルちやんの凧を揚げ　幸葉
凧一つぶと釣糸のそばへ浮き　稔華
露路口を凧をかゝへた子が走り　春坊
二つ三つ廻つて凧は草へ落ち　潮花

凧揚げて居る指先へ雪となり　美津枝
風邪ひいて寢てる二階へ凧が浮き　水客
高架よりビルより高い凧の糸　風葉
責任を持つて殘品さばかれる　みやこ
責任者無口のまゝに親しまれ　潮花
醉眼へ責任の有る腰をあげ　同
手袋を一つ落した春の街　水坊
投げ玉の音が娘を驚かせ　潮花
應召兵新春の街練て行き　幸葉
松の葉がこぼれ年始の客が去に　紫香
緣り無い人が名刺を入れて行き　呑水
祝出征旗立つたまゝ年がすぎ　稔華
虎の皮ゆつくり煙草吸ひつける　水客
首を振る虎鋼床にのつてゐる　水坊
お可笑さをショールで包む髯の人　風葉
お可笑さを隣へ逃げて笑ひこけ　紫香
お可笑さがまだ胸に有るめしを喰ひ　潮花
お可笑さを娘秋で包まれず　美津枝

久米川柳句會（愛媛縣）

十月二日　橋本克海報

秋、祈願、力、占領

秋の陽の白い器へつと走り　青風樓
車窓から秋を讃へる運轉手　大樓
爽秋だハツキリ澄める地平線　靈子
サツパリと散髮をして秋高し　同

次男逝く

一と七日二た七日さて秋の花　同
通夜堂に母は祈願の夜を明かし　九蝶
日參の武運長久の旗並び　靈子
我を忘れ我に返つて祈願する　秀峰
日參の祈願銃後の氣が揃ひ　大樓
心願に怖さ忘れる奥の院　同
方量の標準になる米俵　靈子
鬱憤を晴らす力を酒にさせ　九蝶
明日に備へる力殘そう　克海
力ではいかぬ神秘へ沈默し　大樓
力秘し時の流れの儘となる　九蝶
金になる努力思へば有難し　同
金力へ楯突くこともありたるに　九蝶
潜在の力盡忠錄に見る　克海
神宿る如し銃後の持つ力　大樓
占領は續く日の丸蒔く如し　五健
占領へ一番乘の馬を馳せ　同
占領へ一番乘の馬を馳せ　九蝶
占領のニュー　青風樓
占領へ泣き笑ひなる部隊長　五健
爆烟の霽れ間早や樹つ日章旗　同
萬歳のトーキーとなる占領地　靈子
占領が出來て聯絡まだつかず　克海

有恒川柳會（大阪）

十二月二十七日　於有恒倶樂部

温泉、手紙　大澤報

奥の湯のなやましき姿拭ひ得ず　雨月
谷間に朝霧今日も温泉にひたり　錦浦
恥かしい二人に温泉澄んでゐる　波夢遣
ほこりあびに着飾つて行く寶塚　芳野里
若い客温泉にもつからず飲み明し　しげる
正月を温泉でする身でもなし　同
何事も忘れて來たと湯治客　同
御年始は旅ですからと温泉場　兆山
温泉場御殿のやうな旅舍がある　乃武路
商用の旅を別府で切上げる　銳々
温泉の薬書で無沙汰詫びてゐる　同
温泉へ行つた相手が皆に知れ　同
梅見からそれて温泉面白し　同
長湯治見るとこはもう見てしまひ　同
勳章もお附もなくて湯友達　同
温泉の浴衣で河鹿つかむ氣か　福
來る度に家内のかわる湯治客　今
湯氣の立つあたりクラブとレートなり　大澤
新線開通で温泉がまた一つ　同
一年に一度の手紙暮に書き　平
表書きの筆跡により後廻し　三
手紙にも喜怒哀樂は表はるゝ　同
無理な事と知りつゝ手紙かゝされる　同
待つ手紙來ずに書出しばかり也　銳々
お袋が靜かに仕舞ふ無心狀　仙園
大學を出て候文苦手なり　同
自分宛の手紙も配る集配手　乃武路
こんな奴でなかつた筈と手紙裂き　芳野里
有難く思へど讀めぬ母の文　同
古文庫昔の友を思ひ出し　竹風
談判は事面倒と手紙にし　錦浦
手紙から無口の才子見出され　兆山
挨拶も手紙となれば堅くなり　しげる
弟にポストへやれぬ宛名書き　同
忙しさ先づ封筒を裏から見　波夢遣
一言居士年賀狀からこね廻し　同
引裂いた手紙の端の女文字　雨月
手紙では少し意見もして見せる　路郎
莫迦にした手紙海外から屆き　同
能筆の父の手紙を屏風に見　同

★各地柳壇への投稿は下記規定に據られたし★

(1) 用紙は原稿用紙又は投句箋のこと　(2) 文字を干瀧明瞭に記載すること
(3) 開催月日及び場所記入のこと　(4) 締切は毎月末とすること　(6) 投句は先
本社宛のこと

輝く戰捷

謹賀新春

阿部閑生
豐中市千歲通二

福田山雨樓
横濱市保土ケ谷町三三三

西田艸樂
大阪市東區元伊勢町昭和園
經營 日の出化學研究所

山本丹路
大阪市住吉區帝塚山中二ノ三八
電話 戎三九二番

大坂形水
大阪府泉北郡高石町南一〇九七

麻生路郎

阪大川柳會
大阪帝國大學醫學部內

有恒川柳會
有恒倶樂部內

松坂倶樂部川柳講座有志
大阪・松坂屋百貨店內

輝く戰捷

謹賀新春

池澤樂居

大阪府下高師濱

澤田四郎作

大阪市西成區玉出本通一丁目
電話天下茶屋二九一三番

米本貴志子

朝霧に里は見えねど大鳥居

征戰半歲年改まつて將に皇軍の犧牲を銃後に生かす年と存じ候

大阪市に取つては

一、愈特別市政が社會正義の線に添ふて具体化する曙光を認め申すべく

二、新設厚生省の誕生と共に市民の体位向上對策と保健社會施設は一段の躍進を要すべく

三、對支經濟發展對策は銃後の護りと共に市政のモットーたるべく

茲に緊張せる新春を迎へて一層の御指導と御後援を祈願仕り候

昭和十三年一月元旦　敬白

大阪市南區難波新地二番町二七
大阪都民新聞社主幹
大阪市會議員
大阪市參事會員　庄　健一

ため

戸倉誠司

（普天）

兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ荘

北支那張家口東安大街一七號

カフエーオペラ

岩崎柳路

同　松代

電話二三五番・二三七番

輝く戰捷　謹賀新春

川柳雜誌社
御池橋支部

村松夢裡　大阪市住吉區住吉町一七二七
後藤青兒　大阪市東成區生野ケ丘
西いわを　大阪市東成區南生野町二ノ六二

川柳雜誌社
梅田支部

鷹野雨聲　皆見一男
武田安雄　都藤古木
山下秀峰　宮本あきら
辻遊歩　川村觀月
幹事
天野卜居　水谷鮎美
横田方眠　田邊由布
中辻冬扇　松枝靜波
松吉稼遊　增元翠陽
仙波夕人　酒井斗風

川柳雜誌社
廣島支部

幹事　濱田久米雄
事務所　廣島市仁保町青崎一〇八

川柳雜誌社大鐵局支部
畔柳社

川柳雜誌社
鶴町支部

加藤ライト
照屋寛柳
西端南天
上山よしみ
富岡巨人
淺鎌公
岩橋双虎
米谷松太樓
松下小柳子
澤田粒子
宮岡白峯
妹尾變人

川柳雜誌社名古屋支部
吉田水車

名古屋千種區田代町堀割七八

戰勝の春我が掌の中に温めつ　雨迷

常任監査役　山本彌一郎
大阪市東淀川區中津濱通一
電話北三八〇五
專務取締役　鳥山隆夫
大阪市東淀川區國次町二九七

鐘紡、東紡、三菱その他各大紡績會社御指定品製作

株式會社
合成化學工業所

本社　大阪市東淀川區長柄中通二丁目一〇番地
電話櫻川(35)一二八七番

川柳雜誌社
岡町支部

紫香水客
風葉潮花

川柳雜誌社
今治支部

今治市米屋町一　谷心府
今治市神明町　長野文庫
今治市寺町一三九　渡邊曉童

川柳雜誌社松江支部
勝谷山川兒

輝く戰捷

謹賀新春

橋本綠雨 大阪市住吉區平野西之町八三	高橋かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一電話五九六番	朝田新水 大阪市外三鄕町西橋波五六九電話守口二五五番	富本無煙 大阪市北區中ノ島五丁目四八電話土佐堀五七一八	姫田夕鐘 大阪市大正區小林町三六	市塲沒食子 市内中川町三〇二地但シ今里新地公園東筋南へ一丁半西側大衆喫茶さくら
中西おさむ 大阪市東成區北生野町一丁目二十八番地	鳥生古弗 廣島市小町三一岡田方	尼綠之助 島根縣簸川郡高松村	高峰柳兒 長野縣須坂町	古寺謙南坊 大阪市北區黑崎町一九	西村山月 福田鶴峰
長崎柳秀 大阪帝國大學醫學部	高島玉兎朗 東京市日本橋區蠣殼町四ノ一	松盛琴人	柳大門	櫻井圓角 大阪市東區兩替町松屋町電話東五三一二番	高鷲亞鈍
川柳雜誌社松山支部 酒井大樓	川柳雜誌社天王寺支部 須崎豆秋 大阪市住吉區旭町三ノ一四	川柳雜誌社西條支部 荒井英賀夫 愛媛縣西條町本通	大阪寫眞製版所 大阪市北區堂島濱通一電話北㊱四二四五番	公立社書店 大阪市南區日本橋南詰南入電話南五六二番	工藤清寫眞館 肥後橋南詰昭和通西南側電話土佐堀五五五〇番

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會役員及不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十五卷 第三號課題

一月卅日締切（十句以內）

ほち袋　長崎柳秀選

舞扇　妹尾變人選

第十五卷 第四號課題

二月廿五日締切（十句以內）

出世　小林不浪人選

眼病　姫田夕鐘選

毎號募集

近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

★★★★★ 記後 ★★★★★

▼惡戰苦鬪の歷史を綴りながらも輝かしい春を迎へた。しかも我等は川柳史を綴りつゝあることに大きな誇りを抱いて居る。

▼昨年十月末、昭和ビルに事務所を開いてから柳務の多忙は筆紙に絕した。午前〇時一時は連夜のことゝ散夜して編輯に當つたことすらあつた。十二月號から新春號へと大晦日の夜まで働きぬいた。そこには日曜も祭日もなかつた。明けて十三年は、二日から事務所にガン張つた。

▼一月特輯號から十五日發行と改めた。本誌の創刊當時は十五日發行だつた。

▼本誌も數へ年十五、スツカリ大人になりきつた。型も菊倍に變つたし、紙質もウンとよくして華々しくデビューすることゝなつた。

▲「元日を語る」は名家の元日生活記錄だ。年末に出す新年號に見る雜俎の記事とはいさゝか類を異にする點に於て誇りを持つものだ。

▼本誌の紙價を高からしめてゐる柳人必讀の「武玉川三篇研究」は既に三篇全部の研究が終つた事を報告して愛讀者の御期待を乞ふ。

▼表紙の文樂人形は創刊號の表紙を描いた柴谷宰二郎畫伯を煩はした。

▼川協に移管された「日本柳壇百人撰」の第一回の發表である撰まれたる人々の中には從軍中の人々もあり、又回答に接することの出來なかつた人もあつた明年度の人選については協會役員によつて行はれることになつた。

▼私の一月は編輯と、句會への出席と、揮毫によつて奪はれた川柳人として全能力を發揮したとも云へば云へる毎日だつた。

▼二月號への御支援を切望してやまない。

▼終りに賀狀を賜はつた方々へあつく御禮を申上げる。

（路郎生）

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十三年一月一〇日印刷　第十五卷　第一號

昭和十三年一月十五日發行　（毎月一回十五日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番　振替大阪七五〇五〇番

事務所　大阪市西區江戸堀（筑前橋電停前）昭和ビル第一號室　電話土佐堀三三三三・八一六三・一八六四

東京市蒲田町女塚町二丁目二二ノ一　川柳雜誌社東京支社

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大寶捌大寶書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店　其他　市內各書店（東泉）かん東京堂　かん嚴松堂　よつ吉岡書店　あさ玉森堂　きん紀伊國屋　さ三味堂（神戸）　米田寶文館（函館）　石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

社關係の人々（いろは順）

主幹

麻生路郎

賛助員

藤本卯之助　米村あん馬　池澤樂居　田村孝之介　長谷川一徹　谷脇素文　大道弘雄　生方敏郎　岡本一平　高橋かほる　片岡直方　福田山雨樓　笠原路生　高尾亮雄　田中純二　窪田銀波樓　嘉納毅　安川久留美　田辺長太郎　前田雀郎　長崎柳秀　岡崎三郎　長野晴濱　田里十九　長岡半太郎　西田神樂　國枝史郎　永田丹路　藤村作

會員

伊藤彦造　鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　小川武夫　大西長三郎　食満南北　柴谷宰二郎　篠原春雨　姫田夕鐘　朝田水谷　村松夢二　市場沒食子　吉田水車　妹尾變人　丸尾潮花　大坂形水　西八歩　須崎豆秋　松下元紀　小柳子太　後藤青兒　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　江戸みつる　近藤ライト　加藤正夫　黑川紫香　丸本彗星　水谷鮎美　古賀弗子　川上三太郎　亀井晟修　小林不濱人　森東魚　川村花菱

不朽洞會員

本條雨樓　高橋かほる　福田山雨樓　高尾亮雄　窪田銀波樓　安川久留美　前田雀郎　前田五健　南北　北山悟郎　水谷鮎美　新水　朝田夕鐘　姫田夢二　村松　市場沒食子　吉田水車　妹尾變人　大坂形水

★

岩崎柳路　中西おさむ　原史風　江戸みつる　近藤ライト　加藤正夫　黑川紫香　丸本彗星　水谷客　古賀弗子　川上三太郎　亀井晟修　小林不濱人　森東魚　川村花菱

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
田邊支部（和歌山）　辻左馬
簸川支部（島根縣）　尼絲之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
御旅支部（大阪市）　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒

大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
光輝會（大阪市）　竹內機見女
今里支部（大阪市）　市寺沒食子
今治支部（今治市）　渡邊曉童
光笑會（大阪市）　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）　松井可笑
十三支部（大阪市）　淺野牧人
臺中支部（臺灣）　宮內耕期
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
岡町支部（豐中市）　丸尾潮花

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日発行）
昭和十三年一月十日印刷納本　昭和十三年一月十五日発行

川柳雑誌　NO・168　定價金30錢　送料壹錢

にきびとり美顔水

▲御家庭に常備せられたき

美容衛生藥

ニキビ吹出物に第一等の良藥である上に、日常美容藥としても勝れた効果があるので男女共に廣く賞用されてゐます

—主なる用途—

(1) ニキビ吹出物の治療と豫防に……
(2) 洗面後、入浴後、お顔剃り後等のお肌の保護と美に……
(3) 美容藥として御常用に……
(4) 蚤・蚊・南京虫等の毒虫にさゝれた時に
(5) 脂肪性の方のお化粧下に……

三十五錢・五十錢・一円

お徳用な新裝品

本舗　株式會社　桃谷順天館